

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 250

朱 千 駄 古 墳

県道馬屋瀬戸線道路改築に伴う発掘調査

2019

岡山県教育委員会

序

本書は、県道馬屋瀬戸線道路改築に伴い発掘調査を実施した、朱千駄古墳の発掘調査報告書です。

赤磐市馬屋を起点とし、岡山市東区瀬戸町笹岡に至る県道馬屋瀬戸線は、ほぼ全線にわたって1～1.5車線幅の狭い県道のため、交通の円滑化と安全性の向上を目的とした適切な幅員確保が必要であることから、道路の拡幅工事が計画されました。

岡山県教育委員会では、この工事区間に所在する朱千駄古墳の取扱いについて、従前から関係部局と協議を重ねてまいりましたが、現状のまま保存することが困難な部分については、やむを得ず記録保存の措置を講じることとし、平成29年度に発掘調査を実施いたしました。

朱千駄古墳は、岡山県第3位の墳丘規模をもつ両宮山古墳の南西約700mに位置する、5世紀後半に築造された前方後円墳です。かつて後円部には竜山石製の長持形石棺が納められ、棺内からは本墳の名称の由来となった大量の朱をはじめ、銅鏡・玉類・鉄製品などの副葬品が出土したとされます。

調査の結果、朝顔形・円筒埴輪や器財・人物などの形象埴輪がまとまって出土し、備前地域の中期古墳の実態を解明する上で、貴重な成果となりました。

本書が地域史研究の資料として、また埋蔵文化財の保護・保存のため活用されることを期待いたします。

最後に、発掘調査及び報告書作成に当たりましては、備前県民局をはじめとする関係機関や地元住民の皆様から御理解・御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

令和元年12月

岡山県古代吉備文化財センター
所長 向井重明

例 言

- 1 本書は、県道馬屋瀬戸線道路改築に伴い、岡山県教育委員会が岡山県備前県民局建設部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センター（以下、文化財センター）が実施した、朱千駄古墳の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査を実施した朱千駄古墳は、赤磐市馬屋423-1ほかに所在する。
- 3 確認調査は、平成28年度に文化財センター職員 河合忍が担当して、平成28年6月13日～21日に実施した。調査面積は35㎡である。本発掘調査は、平成29年度に文化財センター職員 澤山孝之・氏平昭則・和田剛が担当して、平成30年1月4日～3月9日に実施した。調査面積は440㎡である。
- 4 本発掘調査にあたっては、埋蔵文化財専門委員の稲田孝司・亀田修一氏から御指導と御助言を頂いた。記して深く感謝の意を表す次第である。
- 5 本書の作成は、平成30年度に澤山が担当し、文化財センターにて実施した。
- 6 本書の執筆は、文化財センター職員 大橋雅也・澤山・氏平・和田が分担し、全体の編集は澤山が行った。
- 7 本書の作成にあたり、遺物に関する評価及び鑑定・分析を下記の諸氏に依頼して有益な教示を受けた。記して厚くお礼申し上げる。

埴輪の評価	廣瀬 覚（奈良文化財研究所）
埴輪の胎土分析	白石 純（岡山理科大学）
- 8 第4・5・29図は、赤磐市教育委員会から朱千駄古墳と周辺の地形測量図の提供を受けて、文化財センターが作図した。また、埴輪の胎土分析にあたっては、同教育委員会が所蔵する森山古墳・小山古墳及び亀池表採資料の埴輪の提供を受けた。
- 9 第37図の写真は、赤磐市山陽郷土資料館が所蔵する森山古墳・小山古墳の埴輪を文化財センター職員が撮影した。
- 10 遺物写真の撮影については、江尻泰幸の協力と援助を得た。
- 11 本書に収載した遺構・遺物の図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

- 1 高度値は標高である。
- 2 掲載図が示す北方位は、平面直角座標第Ⅴ系（世界測地系）の座標北である。
- 3 掲載図及び報告書抄録の座標値・経緯度は、世界測地系に準拠している。
- 4 遺構・遺物の縮尺は、個々に明記している。
- 5 遺物番号はすべて通し番号とした。
- 6 遺物図のうち、中軸線の両側に白抜きのあるものは、径が不確実であることを示す。
- 7 土層と遺物の色調は、『新版標準土色帖』2002（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠している。
- 8 第2図の周辺遺跡分布図は、国土地理院の「電子地形図25000」を使用し、加筆したものである。
- 9 時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、必要に応じて文化史区分・世紀などを併用している。

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
第1章 序説	1
第1節 地理的・歴史的環境	1
第2節 古墳の概要	4
第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 発掘調査の経過	6
第3節 報告書作成の経過	6
第4節 日誌抄	7
第5節 発掘調査及び報告書作成の体制	7
第3章 発掘調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 遺構	9
第3節 遺物	15
第4章 自然科学的分野における鑑定・分析	31
第1節 朱千駄古墳出土埴輪の胎土分析	31
第5章 総括	35
第1節 調査の成果	35
第2節 埴輪について	35
遺物観察表	
図版	
報告書抄録	

目 次

第1図	遺跡位置図 (1/1,500,000) ……………	1	第20図	形象埴輪 1 (1/6) ……………	25
第2図	周辺遺跡分布図 (1/50,000) ……………	2	第21図	形象埴輪 2 (1/4) ……………	26
第3図	朱千駄古墳周辺図 (1/12,000) ……………	3	第22図	胎土分析埴輪 (1/4) ……………	27
第4図	調査区配置図 (1/1,000) ……………	6	第23図	須恵器・土師器・瓦 1 (1/4) ……………	28
第5図	調査区全体図 (1/400) ……………	10	第24図	瓦 2 (1/4) ……………	29
第6図	調査区北壁土層柱状模式図 (1/60) ……	11	第25図	瓦 3 (1/4) ……………	30
第7図	1区西側平・断面図 (1/150・1/60) ……	12	第26図	朱千駄古墳出土埴輪胎土比較 ……	33
第8図	1区西側C—D断面図 (1/60) ……………	13	第27図	朱千駄古墳と周辺古墳出土埴輪の比較 ……	33
第9図	1区東側平・断面図 (1/150・1/60) ……	13	第28図	各部位計測凡例 ……………	35
第10図	2区東側平・断面図 (1/150・1/60) ……	14	第29図	調査区・朱千駄古墳周辺平・断面図 (1/2,000・1/400) ……………	36
第11図	円筒埴輪 1 (1/6) ……………	15	第30図	ハケパターン分類図 (1/1) ……………	37
第12図	円筒埴輪 2 (1/6) ……………	16	第31図	口縁部類型図 ……………	38
第13図	円筒埴輪 3 (1/6) ……………	17	第32図	線刻類型図 ……………	38
第14図	円筒埴輪 4 (1/6) ……………	18	第33図	突帯形状類型図 ……………	38
第15図	円筒埴輪 5 (1/6) ……………	19	第34図	突帯高数分布図 ……………	38
第16図	朝顔形埴輪 1 (1/6) ……………	21	第35図	底部押圧類型図 ……………	38
第17図	朝顔形埴輪 2 (1/6) ……………	22	第36図	外面調整類型図 ……………	38
第18図	線刻をもつ円筒埴輪 1 (1/4) ……………	23	第37図	周辺古墳とのハケパターン比較図(1/1) ……	40
第19図	線刻をもつ円筒埴輪 2 (1/4) ……………	24			

図 版 目 次

図版 1	1 朱千駄古墳遠景 (北から)	1 2区西完掘状況 (南東から)
	2 1区西完掘状況 (東から)	2 2区東完掘状況 (西から)
	3 1区西端状況 (東から)	3 2区東完掘状況 (東から)
図版 2	1 1区中完掘状況 (東から)	図版 4
	2 1区東完掘状況 (東から)	円筒埴輪
	3 1区東側断面 (南から)	図版 5
図版 3		円筒埴輪・朝顔形埴輪・線刻をもつ円筒埴輪
		図版 6
		形象埴輪・土師器

写 真 目 次

写真 1	朱千駄古墳出土埴輪No10(Bグループ) ……	32	写真 3	穂崎亀池散布地出土埴輪No.1 ……………	32
写真 2	朱千駄古墳出土埴輪No13(Aグループ) ……	32			

表 目 次

表 1	文化財保護法に基づく文書一覧 ……………	8	表 3	遺物観察表 ……………	41
表 2	埴輪胎土分析一覧表 ……………	34			

第1章 序説

第1節 地理的・歴史的環境

朱千駄古墳は赤磐市馬屋・穂崎に所在する。行政的には現在の県道馬屋瀬戸線が馬屋と穂崎の字境となっており、今回の調査対象地は馬屋側にあたる。この古墳の位置する表層地質は、洪積世の堆積物であり、近くの丘陵部には花崗岩・流紋岩が認められる。また、地形分類では低地（谷底平野・氾濫平野、扇状地）に該当し、山陽地域の中央を南方向に流れる砂川の両岸に広がる、いわゆる砂川中流域平野にあたる。この平野には等高線に沿うように耕作地が認められるが、大河川が存在しないため水源の確保が難しく、灌漑用のため池が多く掘削されている。古墳周辺では南接する位置に阿部池、古墳南側の丘陵上部にソーケ池、古墳北東側の田地に仁王堂池が設けられている。

砂川中流域平野には、古くは縄文時代晩期の堅実類の貯蔵穴が検出された南方前池遺跡が所在し、弥生時代からは顕著な集落の集中が認められる。また、古墳時代中期には、吉備の3大古墳の1つである両宮山古墳の築造を契機に盛んな造墓活動が見られ、奈良時代には国分二寺の造営や古代山陽道の高月駅の設置が行われるなど、長らく備前地域の政治・文化の中心地となっていた。

弥生時代中期の集落遺跡では、東高月丘陵の惣囷遺跡や門前池遺跡が著名であるが、なかでも用木山遺跡は遺構密度や遺物量から、この地域の拠点的な集落の1つと言える。弥生時代後期になると、門前池東方遺跡、斎富遺跡などのように丘陵地から平地に選地していった集落遺跡が現れる。また、丘陵上には四辻土壙墓群、愛宕山遺跡、便木山遺跡などの墳墓が築造され、これらは以後の首長墓出現の萌芽と見て取れる。

古墳時代前期に入ると、東高月丘陵において、円墳である用木1号墳（径31m）から前方後円墳である用木3号墳（全長42m）と続く首長墓の系列が認められる。その後、前方後円墳の吉原6号墳（全長52m）が築かれるが、造墓活動は低調に推移する。これは、当地域における造墓の主体となる首長層の地位が低下した結果と見られる。

中期中葉になると、墳長206mの前方後円墳である両宮山古墳が築造される。確認調査では二重周濠が検出され、外濠まで含む全長は349mにも達する。墳丘は3段築成で、後円部径116m、前方部長は110m、前方部幅145m、前方部高さは25.1mを測る。これまでに葺石や埴輪は確認されていない。両宮山古墳と南接する和田茶臼山古墳（全長55m）は二重周濠を有する帆立貝形古墳で



第1図 遺跡位置図 (1/1,500,000)



- | | | | | | |
|--------------|-------------------|------------|--------------------|-----------|-----------------------|
| 1 朱千駄古墳 | 2 八塚1号墳 | 3 八塚3号墳 | 4 西奥古墳 | 5 可真木古墳群 | 6 石相古墳群 |
| 7 祇園古墳群 | 8 大松1号墳 | 9 二塚1号墳 | 10 二塚2号墳 | 11 沼田内古墳 | 12 慶貞1号墳 |
| 13 小天満2号墳 | 14 鳥取上高塚古墳 | 15 陣屋古墳群 | 16 ほんこう古墳群 | 17 宮地山古墳群 | 18 吉原遺跡・古墳群 |
| 19 津崎1号墳 | 20 片井池古墳 | 21 葛木城跡 | 22 善応寺城跡 | 23 正崎城跡 | 24 正崎古墳群 |
| 25 前内池遺跡・古墳群 | 26 稗田古墳群 | 27 土井遺跡 | 28 八つ塚古墳群 | 29 畑古墳 | 30 見上古墳 |
| 31 塚本古墳 | 32 小丸山古墳 | 33 婦本路古墳群 | 34 弥上古墳 | 35 日古木古墳群 | 36 中島古墳群 |
| 37 中島東古墳群 | 38 別所古墳群 | 39 南奥池古墳群 | 40 雨壺1号墳 | 41 斎富古墳群 | 42 斎富遺跡 |
| 43 南方前池遺跡 | 44 門前池西方遺跡 | 45 門前池東方遺跡 | 46 便木山遺跡・方形台状墓・古墳群 | 47 用木古墳群 | 48 四辻土壇墓遺跡・峠方形台状墓・古墳群 |
| 49 用木山遺跡 | 50 愛宕山遺跡・土壇墓群・古墳群 | 51 惣凶遺跡 | 52 岩田古墳群 | 53 岩田14号墳 | 54 着銅遺跡 |
| 55 山の間遺跡 | 56 両宮山古墳 | 57 和田茶白山古墳 | 58 森山古墳 | 59 正免東古墳 | 60 小山古墳 |
| 61 廻り山古墳 | 62 備前国分寺跡 | 63 馬屋遺跡 | 64 備前国分尼寺跡 | 65 牟佐大塚古墳 | 66 凧遺跡 |
| 67 玉井丸山古墳 | 68 大廻小廻山城跡 | 69 陣場山古墳群 | | | |

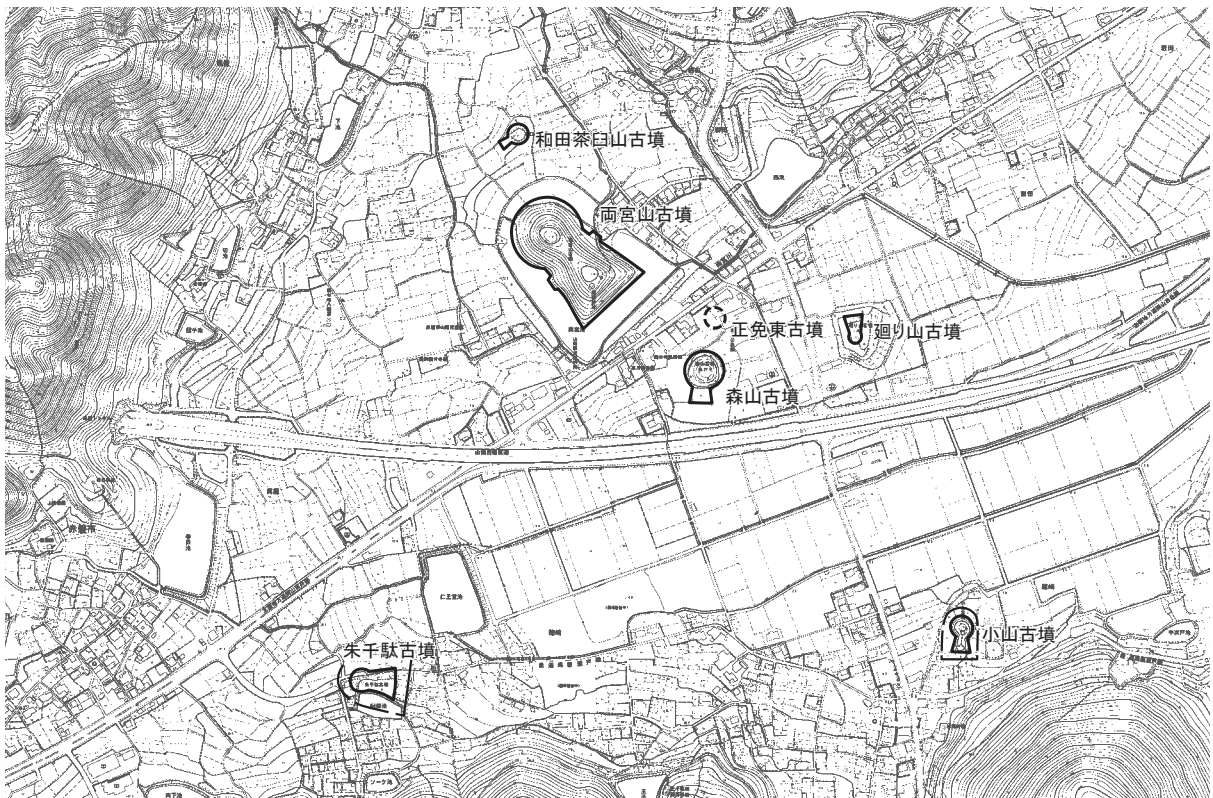
第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

あり、こちらも葺石や埴輪は未確認である。両宮山古墳の南東側では、正免東古墳（径23m）と森山古墳（全長82m）が築造されている。正免東古墳は削平のため詳細不明だが、円墳あるいは帆立貝形古墳と想定される。森山古墳は県下最大規模の帆立貝形古墳であり、葺石と埴輪が確認されている。

中期後葉になると、両宮山古墳から南方に離れた丘陵裾部に、本書で報告する朱千駄古墳と小山古墳（全長53m）の前方後円墳が築造される。小山古墳には阿蘇溶結凝灰岩製の家形石棺が伴うほか、埴輪が出土している。後期前半には、廻り山古墳（全長47m）が両宮山古墳近くの小丘陵に造られ、これをもってこの地域の首長墳の築造が終了する。なお、中期中葉以降からは、中小規模の円墳の築造が活発になり、特に銅鏡・三環鈴・甲冑などが出土した正崎2号墳（径20m）は注目される。

一方、この平野北部の赤坂地域では、中期後葉頃に前方後円墳の二塚1号墳（全長37m）が築かれ、その後、慶貞1号墳（全長31m）、沼田内古墳（全長32m）、二塚2号墳（全長23m）、そして、横穴式石室をもつ鳥取上高塚古墳（全長75m、石室長約15m）が築造される。また、熊山地域でも、横穴式石室をもつ小丸山古墳（全長33m）や弥上古墳（全長30m）の前方後円墳が築造される。こうした状況は、両宮山古墳周辺で行われた造墓活動以降の動向を見る上で示唆に富む。後期後半以降では、環頭大刀や雁木玉などの副葬品が出土した岩田14号墳（石室長11.8m）や浪形石製の家形石棺が伴う牟佐大塚古墳（石室長18m）などの円墳が築造され、当地が備前地域において重要な場所であったことが窺える。

加えて、この平野は、朝鮮半島由来の文物や技術を受け入れたことを示す遺跡も多い。斎富遺跡は、陶質・陶質系土器、軟質・軟質系土器や紡錘車などの遺物から、中期以降に朝鮮半島から継続的に渡来した人々の拠点集落と考えられている。また、鉄鋌石・羽口・鉄滓の出土から、後期後半に鉄生産が行われた可能性も指摘されている。土井遺跡では、埴輪と陶棺を焼成した後期後半の窖窯が2基検出され、遺物では鉄滓や鉄鐸が出土したことから、窯業や鉄に関わる生産活動が想定されている。こ



第3図 朱千駄古墳周辺図 (1/12,000)

うした状況から、当時の首長層は、先進技術をもつ集団とそこから作り出された生産物を掌握する役割も果たしていたと思われる。

古代になると、再び両宮山古墳周辺に主要遺跡が見られる。古代山陽道は両宮山古墳の南側を通り、岡山市北区牟佐へ向かって西進する。馬屋森向遺跡、馬屋出水遺跡、馬屋遺跡は掘立柱建物や瓦を伴い、高月駅関連の遺跡と考えられる。備前国分寺は両宮山古墳の西隣に建立され、備前国分尼寺は朱千駄古墳の北側にある仁王堂池周辺に比定されている。斎富遺跡では、奈良時代の溝による1町四方の方形区画内に掘立柱建物が多数検出され、官衙機能を有した集落と位置づけられている。(氏平)

第2節 古墳の概要

ここでは、現在までに判明している朱千駄古墳の概要についてまとめる。これまでに古墳本体の発掘調査は実施されていないが、主体部は明治時代の初め頃に盗掘を受けており、遺物が採集されたと伝わる。墳丘規模は、墳丘残存長が62m、前方部残存幅が33mであり、墳丘長は80m程度と推定されている。墳丘は2段築成であり、後円部中央には、主軸と並行となる位置に竜山石製の長持形石棺が据えられていたとされる。棺身は長方形の底石、両短辺に縄掛突起を作り出した側石2枚、表面に突起を1または2つ作り出した小口石2枚を組み合わせたもので、長辺は縄掛突起を除いて2.1m、短辺は0.8～0.9m、高さ0.7mを測る。棺蓋にも縄掛突起が短辺側に1つずつ、長辺側縁に2つ、その反対の長辺の上面に2つが作り出され、蓋の高さは0.3mである。石棺内からは多量の朱が見つかり、これが朱千駄古墳と呼ばれる由来となっている。石棺内の重要遺物として、蛇行状鉄器1点、尚方作神人歌舞画像鏡1面があり、鏡式・所在共に不明の銅鏡がもう1面あったとされる。この他には鉄槍1点、硬玉勾玉1点・管玉5点、ガラス勾玉2点・小玉44点が認められる。また、墳丘からは土師質・須恵質の円筒埴輪、須恵器杯身が表採されている。県道馬屋瀬戸線に伴う平成4年の確認調査では、くびれ部付近で墳丘端と考えられる下がりが見出され、埴輪片が出土している。(氏平)

主な参考文献

- 『土地分類基本調査 和気・播州赤穂』岡山県 1977
- 『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』1・2・4 山陽町教育委員会 1971～1977
- 『森山古墳 両宮山古墳』『山陽町文化財調査報告』第2集 赤磐市教育委員会 2004
- 『両宮山古墳2』『赤磐市文化財調査報告』12 赤磐市教育委員会 2018
- 『正崎2号墳』『山陽町文化財調査報告』第1集 山陽町教育委員会 2004
- 『両宮山古墳以後-古墳時代後期の赤磐と倭王権-』赤磐市史跡シンポジウム記録集2 赤磐市教育委員会 2019
- 『斎富遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』105 岡山県教育委員会 1996
- 『土井遺跡 谷の前遺跡 慶運寺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』191 岡山県教育委員会 2005
- 『松尾古墳群 斎富古墳群 馬屋遺跡ほか』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99 岡山県教育委員会 1995
- 梅原末治「備前国西高月村の古墳」『歴史と地理』13-4 1924
- 葛原克人「朱千駄古墳」『岡山県史』第18巻 考古史料編 1986
- 〔1〕朱千駄古墳』『岡山県埋蔵文化財報告』23 岡山県教育委員会 1993

第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

県道251号馬屋瀬戸線は、赤磐市馬屋を起点とし、岡山市東区瀬戸町笹岡に至る総延長3.2kmの一般県道である。ほぼ全線にわたって1～1.5車線幅ほどの狭い県道であり、主に近隣集落の生活道路として利用されているが、朝夕の通勤通学時間帯には県道岡山吉井線と県道岡山赤穂線を短縮して結ぶ近路として車両の交通量が多くなっている。このため交通の円滑化と安全性の向上を目的とした適切な幅員確保の必要性から道路拡幅工事が従前から計画されてきた。

ところで、この県道馬屋瀬戸線は、主軸を東西にとる全長80m級の前方後円墳である朱千駄古墳の北側を通っている。朱千駄古墳は、かつて後円部から長持形石棺が掘り出され、石棺から多量の朱とともに鏡・玉類・鉄器などが出土し、周辺の両宮山古墳、森山古墳、廻り山古墳、小山古墳とともに吉備を代表する中期古墳として評価されている。このため、古墳の墳丘はすでに大幅に改変されているが、周辺を含め開発工事に関して、その取扱いについて事業関係者と慎重な協議を行ってきた。

まず、平成4年に朱千駄古墳の後円部付近の拡幅工事が計画され、対応方法を検討するために3か所のトレンチを設定し、確認調査を実施した（第4図T1～T3（H4）¹）。この結果、くびれ部近くに設定したトレンチでは、地表下1mで多量の埴輪片を含む、平面で弧状をなす地形の下がり確認された。また後円部北側のトレンチでは東に傾斜する下がりが確認された。この調査結果に基づき、協議の結果、古墳に直接影響が及ばないように道路拡幅工事が実施された。

これ以降、朱千駄古墳周辺の道路拡幅工事は一時中断されていたが、平成27年5月に備前県民局東備地域工務課から県教育庁文化財課に、平成4年の拡幅部分以東、朱千駄古墳前方部側の拡幅工事についての照会があり、改めてその取扱いについての協議を重ねた。そして拡幅工事対象地の状況を把握するため、平成28年6月13日～21日に、4本のトレンチを設定し、確認調査を実施した（第4図T1～T4）。この結果、いずれのトレンチからも朱千駄古墳の墳端に関する遺構こそ確認できなかったが、埴輪片を多量に含む包含層を検出したことから、本来墳丘に樹立された埴輪が、墳丘外の地形の下がりに崩落、堆積しているものと推測された。この調査成果をもとに事業関係者と詳細な協議を行い、工事による掘削部分が埴輪片包含層に一部及ぶことが明らかとなり、やむをえず道路拡幅部分の440㎡について記録保存調査を実施することとなった。

以上の経緯の中で、備前県民局長から平成29年8月に文化財保護法94条に基づく発掘の通知が提出され、同年9月に県教育委員会が発掘調査の勧告を行った。発掘調査は平成30年1月に着手し、同年3月に終了した。

（大橋）

註

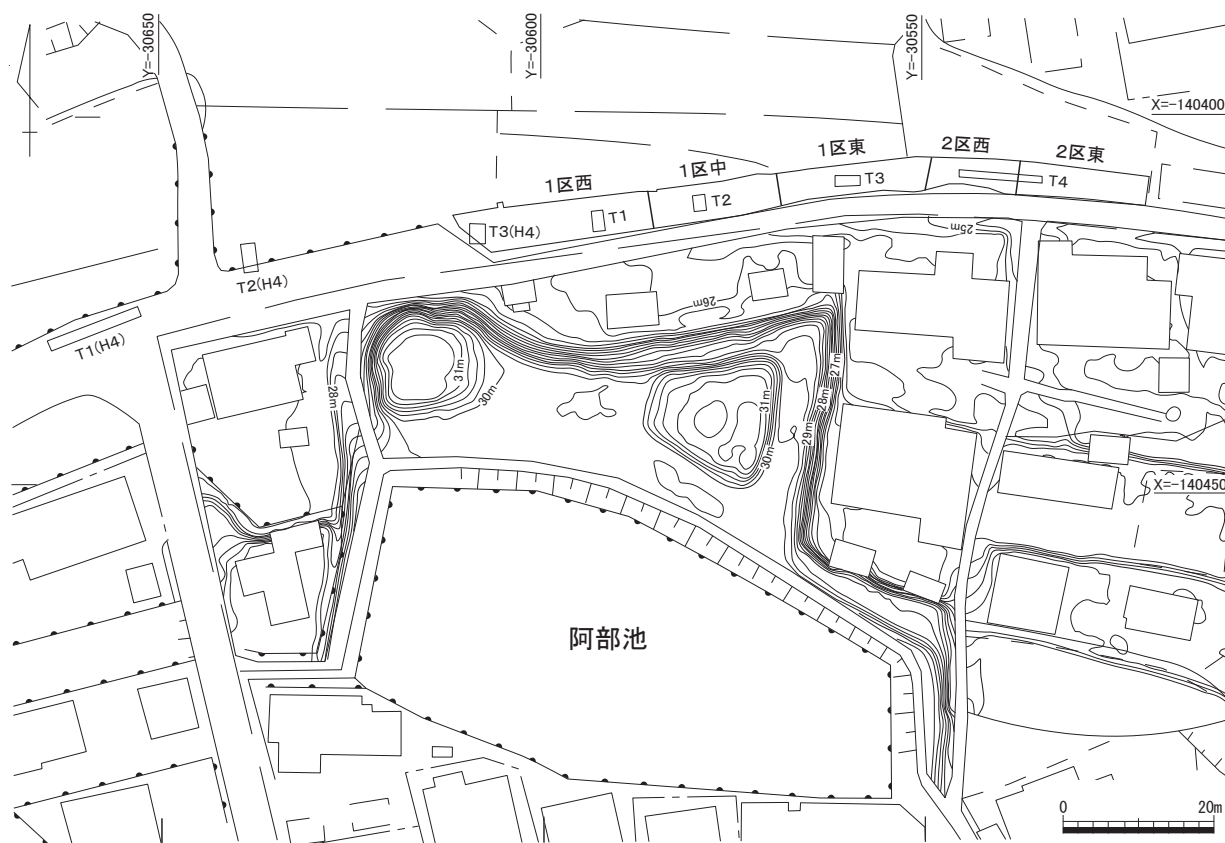
1 「[1]朱千駄古墳」『岡山県埋蔵文化財報告』23 岡山県教育委員会 1993

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は平成30年1月4日～3月30日に文化財センター職員3名が担当した。調査区は現地形を踏まえて、西側から順に1区、2区と設定した。ただし、排土処理や調査対象地に北接する畑への進入路確保のため、1区は3分割、2区は2分割して作業を行った（第4図）。確認調査の成果を基に、表土・造成土・近世以降の水田層等を重機で除去した後、中世包含層から人力で掘削を行いながら遺構の検出作業を進めた。その結果、遺物包含層から古墳時代～中世の遺物、特にまとまった量の埴輪が出土した。遺構は近世以前と思われる3条の溝を検出した。（澤山）

第3節 報告書作成の経過

報告書作成は、平成31年1月4日～3月29日に文化財センター職員1名が担当した。遺物は復元・実測・浄書作業を行い、一部は写真撮影を実施した。このうち、埴輪については専門機関・諸氏に鑑定・分析を依頼し、貴重な成果を得た。遺構は発掘調査で記録した実測図の浄書作業を行い、あわせて掲載用写真の選別を行った。また、古墳の立地や墳丘の形状などの情報を得るために、赤磐市教育委員会から古墳測量図の提供を受けた。その後に割付を行い、原稿執筆・編集作業及び遺物等の収納を進めた。本書では土器7点、埴輪134点、瓦11点、遺構は溝3条について掲載した。（澤山）



第4図 調査区配置図 (1/1,000)

第4節 日誌抄

<p>平成28年度（確認調査）</p> <p>平成28年</p> <p>6月13日（月） 資材搬入、確認調査開始</p> <p>6月21日（火） 資材撤収、確認調査終了</p> <p>平成29年度（発掘調査）</p> <p>平成30年</p> <p>1月4日（木） 発掘調査事業開始</p> <p>1月9日（火） 重機掘削開始</p> <p>1月11日（木） 発掘資材搬入</p> <p style="padding-left: 2em;">1・2区調査開始</p> <p>2月27日（火） 埋蔵文化財専門委員 稲田孝司</p>	<p>氏・亀田修一氏現地指導</p> <p>2区調査終了</p> <p>3月7日（水） 1区調査終了</p> <p>3月9日（金） 発掘資材搬出</p> <p>3月15日（木） 重機埋め戻し終了</p> <p>3月30日（金） 発掘調査事業終了</p> <p>平成30年度（報告書作成）</p> <p>平成31年</p> <p>1月4日（金） 報告書作成開始</p> <p>3月29日（金） 報告書作成終了</p>
--	---

第5節 発掘調査及び報告書作成の体制

<p>平成28年度</p> <p>岡山県教育委員会</p> <p style="padding-left: 2em;">教育長 竹井 千庫</p> <p>岡山県教育庁</p> <p style="padding-left: 2em;">教育次長 内田 広之</p> <p>文化財課</p> <p style="padding-left: 2em;">課長 小見山 晃</p> <p style="padding-left: 2em;">参事（文化財保存・活用担当） 横山 定</p> <p style="padding-left: 2em;">総括参事（埋蔵文化財班長） 大橋 雅也</p> <p style="padding-left: 2em;">主幹 杉山 一雄</p> <p style="padding-left: 2em;">主任 平井 健太</p> <p>岡山県古代吉備文化財センター</p> <p style="padding-left: 2em;">所長 宇垣 匡雅</p> <p style="padding-left: 2em;">次長（総務課長事務取扱） 成本 俊治</p> <p>〈総務課〉</p> <p style="padding-left: 2em;">総括主幹（総務班長） 金藤 賢史</p> <p style="padding-left: 2em;">主任 浦川 徳子</p> <p style="padding-left: 2em;">主任 山内 基寛</p> <p>〈調査第一課〉</p> <p style="padding-left: 2em;">課長 亀山 行雄</p>	<p>総括副参事（第一班長） 尾上 元規</p> <p>主任 河合 忍</p> <p style="text-align: right;">（確認調査担当）</p> <p>平成29年度</p> <p>岡山県教育委員会</p> <p style="padding-left: 2em;">教育長 竹井 千庫</p> <p>岡山県教育庁</p> <p style="padding-left: 2em;">教育次長 日比謙一郎</p> <p>文化財課</p> <p style="padding-left: 2em;">課長 小見山 晃</p> <p style="padding-left: 2em;">参事（文化財保存・活用担当） 横山 定</p> <p style="padding-left: 2em;">総括副参事（埋蔵文化財班長） 柴田 英樹</p> <p style="padding-left: 2em;">主幹 平井 健太</p> <p style="padding-left: 2em;">主任 上村 武</p> <p>岡山県古代吉備文化財センター</p> <p style="padding-left: 2em;">所長 宇垣 匡雅</p> <p style="padding-left: 2em;">次長（総務課長事務取扱） 高田 亮</p> <p style="padding-left: 2em;">参事（文化財保護担当） 大橋 雅也</p> <p>〈総務課〉</p> <p style="padding-left: 2em;">総括副参事（総務班長） 金藤 賢史</p>
---	--

第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

主任	浦川 徳子	参事 (文化財保存・活用担当)	横山 定
主任	東 恵子	総括副参事 (埋蔵文化財班長)	柴田 英樹
〈調査第二課〉		主幹	上梶 武
課長	高田恭一郎	主任	原 珠見
総括副参事 (第一班長)	澤山 孝之 (調査担当)	岡山県古代吉備文化財センター	
		所長	向井 重明
副参事	氏平 昭則 (調査担当)	次長 (総務課長事務取扱)	高田 亮
		参事 (文化財保護担当)	大橋 雅也
主任	和田 剛 (調査担当)	〈総務課〉	
		総括主幹 (総務班長)	甲元 秀和
平成30年度		主任	浦川 徳子
岡山県教育委員会		主任	東 恵子
教育長	鍵本 芳明	〈調査第二課〉	
岡山県教育庁		課長	亀山 行雄
教育次長	日比謙一郎	総括副参事 (第一班長)	澤山 孝之 (整理担当)
文化財課			
課長	大西 治郎		

表1 文化財保護法に基づく文書一覧

埋蔵文化財試掘・確認調査の報告

番号	文書番号 日付	周知・ 周知外	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	包蔵地 の有無	報告者	担当者	期間
1	岡吉調 第39号 H28.6.28	周知	古墳 朱千駄古墳	赤磐市馬屋423-1 ほか	35	県道馬屋瀬戸線 道路改築	有	岡山県古代吉備 文化財センター 所長	河合 忍	H28.6.13 ～ H28.6.21

埋蔵文化財発掘の通知 (法第94条)

番号	文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	目的	通知者	通知日	主な 勧告事項
1	教文理 第761号 H29.9.11	古墳 朱千駄古墳	赤磐市馬屋字湯田423-1、 424-1、430-1	408.49	道路	岡山県備前県民局長	H29.8.17	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告 (法第99条)

番号	文書番号 日付	周知・ 周知外	種類及び名称	所在地	面積 (㎡)	原因	報告者	担当者	期間
1	岡吉調 第100号 H30.1.4	周知	古墳 朱千駄古墳	赤磐市馬屋423-1 ほか	440	県道馬屋瀬戸線 道路改築	岡山県古代吉備 文化財センター 所長	澤山孝之 氏平昭則 和田 剛	H30.1.4 ～ H30.3.9

遺物発見通知 (法第100条)

番号	文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地 所有者	現保管場所
1	教文理 第412号 H28.6.21	埴輪・土器 (土師器・須恵器)・瓦 計 整理箱3箱	赤磐市馬屋423-1、 424-1、430-1 朱千駄古墳	H28.6.13 ～ H28.6.21	岡山県教育委員会 教育長	個人	岡山県古代吉備 文化財センター
2	教文理 第1694号 H30.3.13	須恵器・土師器・埴輪・ 瓦ほか 計 整理箱67箱	赤磐市馬屋423-1ほか 朱千駄古墳	H30.1.4 ～ H30.3.9	岡山県教育委員会 教育長	岡山県	岡山県古代吉備 文化財センター

第3章 発掘調査の成果

第1節 調査の概要

調査地は県道馬屋瀬戸線の北側に沿って東西に細長く延びる範囲であり、既往の研究からは朱千駄古墳北側の墳丘端や周濠及び周堤の存在が想定されうる位置にあたる(第5図)。調査前は水田・畑として利用されており、土層断面からは南西から北東方向に下がる旧地形に沿って、土地の切り盛りが行われていたことが窺われた。これによると、中世後半以降から本格的に耕地が開墾されたようであり、特に1区東と2区西では約70～90cmもの高低差が生じている。

発掘作業は第2章第2節で述べたとおり、第1～8層は重機で除去し、第9層以下の土層は人力で掘削しながら、遺構の検出作業を進めた(第6図)。その結果、前方部側は判然としないが、くびれ部付近と想定される調査区西側で、平成4年度の確認調査で検出した地形の下がりつつつながる痕跡を検出し、墳丘の形状や規模を推測する手がかりが得られた。ただし、墳丘から崩落した葺石や盛土の堆積層が確認できず、また、埴輪片を含む地山直上の堆積層に少量ながら古代の瓦片が含まれることから、後世の地形改変を受けている可能性も考えられる。この他の遺構としては、中世に掘削された溝を3条検出した。

遺物は第9～12層からは古墳時代～中世の遺物、特にまとまった量の埴輪が出土した。埴輪は朝顔形埴輪を含む円筒埴輪が主体を占め、器財・人物などの形象埴輪も認められた。円筒埴輪には筒部径が40cmを超える大型品も存在し、この古墳を評価する指標の1つとなりうる。また、線刻をもつ埴輪が多く見られ、中には斜格子文や二重の渦巻き文、連続した方形文を描画したものも認められた。なお、完形品や大部分が復元できた個体がないことから、すでに埴輪は土層堆積時に細かく破碎、四散していたと推測され、後世の地形改変が示唆される。この他の遺物としては、近接する備前国分尼寺等で用いられたと考えられる古代の丸瓦・平瓦や中世の土師器碗や小皿の破片が出土している。(澤山)

第2節 遺構

1 概説

調査地の現況は水田・畑地で、範囲は東西93m、幅4～6mを測る。全体としては、西が高く東へ下がる地形である。1区は耕作地の段が3つあり、西端部分には調査区を南北方向に横切る用水路が掘削されていた。1・2区の境は、調査区西端から60mの地点で、調査区内の耕作地の段で最も落差の大きい高さ0.7mを測る段となっている。この部分に北へ抜ける畑への進入路と用水路があった。また、2区は全体が1枚の水田であった。南側にある県道馬屋瀬戸線との境には、1区西から1区東までは高さ約1mの石垣の擁壁、1区東と2区西の間は畑への進入路があるため擁壁はなく、2区西から2区東へは高さ約1mのコンクリート製擁壁が作られていた。



第5図 調査区全体図 (1/400)

調査では、調査区全体にわたり北壁の土層断面を記録した。全体の傾向を示すため、第5図の④～⑤部分の断面図を抽出し模式図化したものを第6図に示している。1区では古代～中世初頭の包含層が一部切り下げられながら東端まで続いている。第1～4層は現代耕作に伴う土、第5～8層は中世以降の耕作土・造成土で、第9層は中世包含層、第10～12層は古代～中世初頭の包含層である。第13層は古墳築造以前の包含層と考えられる。地山面は全体として現耕作地の高低差よりも緩やかな傾斜になっているが、柱状図⑤のある2区東端のみ窪地があるため急に落ち込んでいるように見える。

2 1区

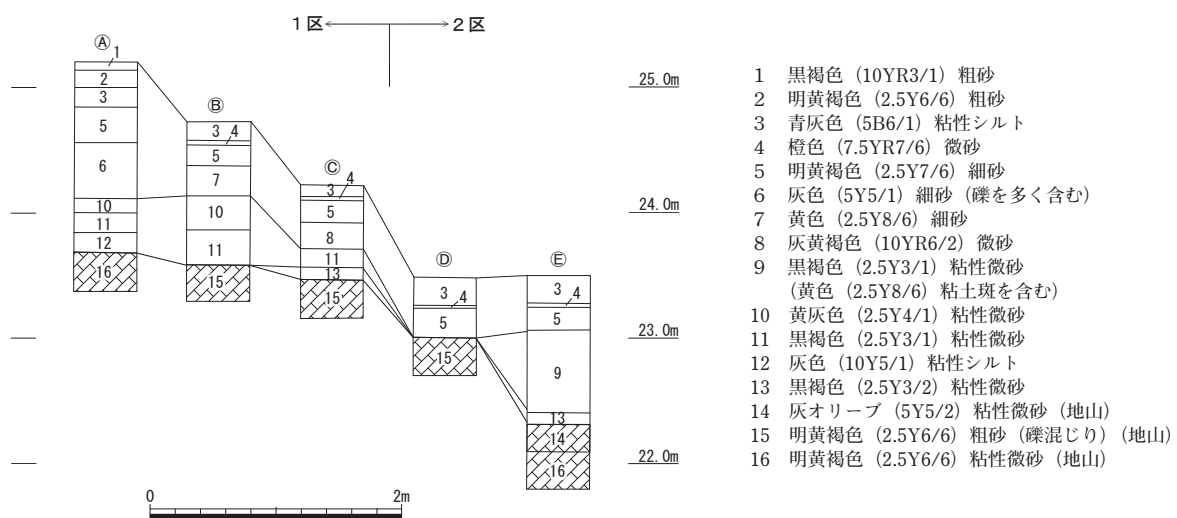
第7図で1区西の西端の土層を示した。第1層が現代耕作に伴う溝、第2～5層も現代耕作に伴う土で、第6～7層は出土遺物が少ないながら中世以降の耕作関連土・造成土と考えられる。第8層以下は埴輪片を多量に含み、当初、第10層は古墳由来の堆積土と想定したが、調査により地山面直上から第23図の手づくね製土師器鉢136、第24図の丸瓦144・平瓦146、第25図の平瓦151などが出土したことにより、同層も古代～中世初頭の包含層と考えるに至った。

1区西の地山面の地形を第7図に示した。地山面は古代～中世初頭包含層堆積前の地形と考えられ、微細な地形変化を示すため10cmの等高線で計測した。

1区西の西端、朱千駄古墳のくびれ部が想定される位置に最も近い地点で、平面図の1点鎖点で示した傾斜の変換ラインを検出した。傾斜変換のラインは北西－南東方向に延びており、緩い「く」の字状に湾曲している。第8図にC－D断面を示しているが、標高23.8m付近で地山面の傾斜変換が認められ、地山の角度は北側の約7°から30°へと急になっている。

1区西の傾斜変換ラインより東側の地形は、C－D断面付近の北端が窪地となり、東へ向かっていったん高くなる。地山面は1区西の中央付近で高まりに達し、そこから1区中まではほぼ水平、1区東の西端からは南東方向へ下がる斜面で東端へ続いている（第5図）。

第9図で1区東の東端土層を示した。第1～3層は現代耕作土と現代の溝、第4～8・10層も現代耕作に伴う造成土・床土など、第9層は近世以降の造成土である。第11層は礫を多く含み、かつて石垣が存在した可能性がある。第12～15層が中世と考えられ、第14層は溝1埋土で中世包含層を掘り込



第6図 調査区北壁土層柱状模式図 (1/60)

んでいる。第16層は1区西より続く古代～中世初頭の包含層、第17層からは土師器が出土し、古墳築造以前の包含層の可能性はある。

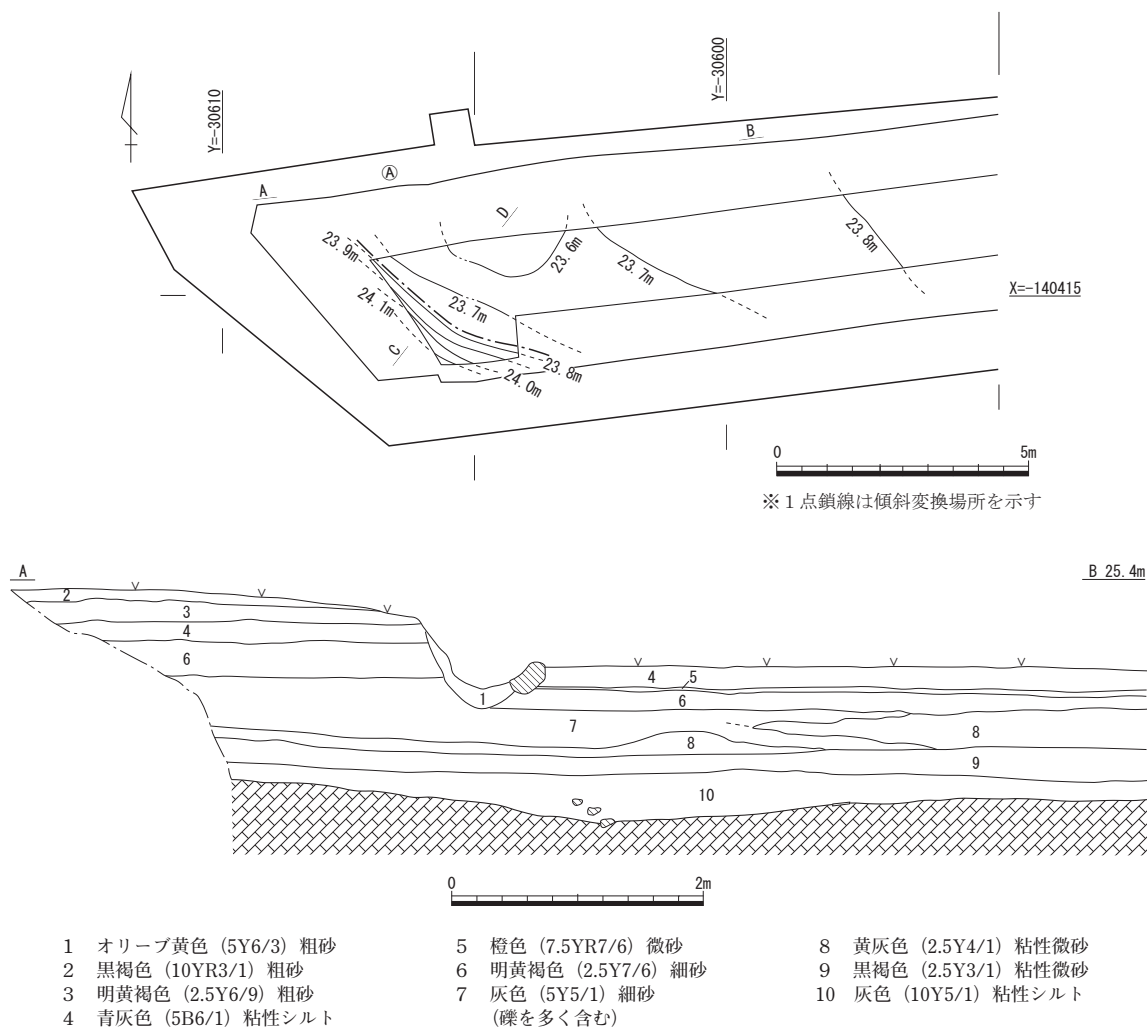
溝1は幅75cm、深さ20cmを測り、断面がU字形を呈する。調査区内での検出状況から、南東から北西方向へ流れていたものと思われる。中世以降の耕作に伴う溝の可能性が高い。

地山直上の面は、1区東の中央から2区西へ向かっては、現在の水田層のような落差は存在せず、緩やかに南東方向へ下がっていく。1区東と2区西の間で傾斜の方向が変わり、北東方向に下がる地形となっているようであるが、その境界は判然としない。

3 2区

第10図に2区東の東端部土層を示している。第1～3層は現代水田関連、第4層は水田造成土（第9図第9層相当）、第5層は暗渠埋土、第6～7層は溝2、第8～10層は溝3埋土である。また、第11層は古代～中世初頭包含層、第12層は埴輪片を多く含む中世包含層である。第13層は自然堆積と考えられ、色調は黒が際立っている。後述するが、朱千駄古墳以前の古墳時代包含層と考えている。

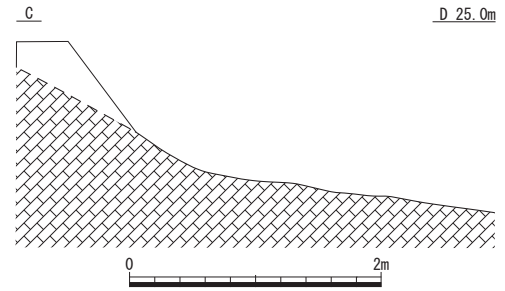
2区東の西端で、溝2と溝3の2条の溝を検出した。溝2と溝3は重複しているが、断面観察により溝2が新しいことがわかる。ただし、当初2条の溝が重なっているとは認識できなかったため、そ



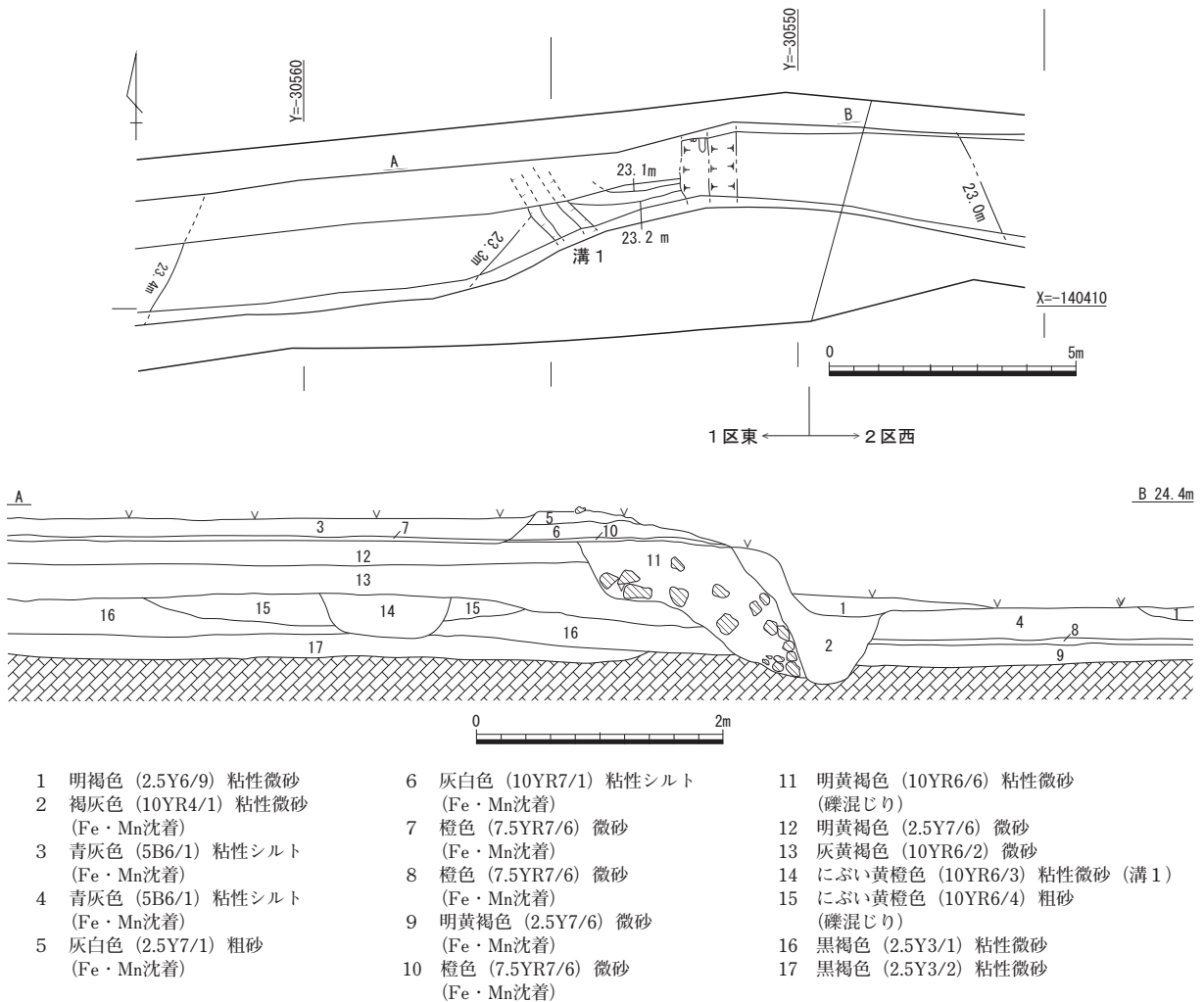
第7図 1区西側平・断面図 (1/150・1/60)

の時点で出土した土師器皿139、平瓦149はどちらの溝に属するか判別できなかった。須恵器甕141と平瓦145は溝3からの出土で、他に両溝の埋土中には埴輪片を多く含む。溝2・3の時期はこうした状況から中世と判断した。溝2の規模は幅2.1m、深さ1.0mで、溝3では深さ1.5mを測る。溝3の断面はV字状を呈し、底面はさらに1段深く掘り込まれている(第10層)。これに対して溝2の断面は箱形ないしU字形を呈する。また、検出範囲が狭いため判然としないが、溝2の底面は場所によって深さが一定ではないように見受けられる。溝2・3は断面形状が異なるものの、流れる方向はいずれも南から北であることから、同一の機能を持った溝と解釈できる。

2区西端から溝2・3までの間は、第9図第9層の造成土直下がほぼ水平を呈しており、近世以降耕作関連の削平を受けた可能性が高い。地山面の状況であるが、2区西の西側では造成土直下に地山が露出し、地山も掘り下げられていることがわかる。一方、2区西の東側では第11層の古代～中世初頭の包含層が一部残存していて、地形は溝2・3の西岸まで東へ向かって若干高くなる様子が窺える。

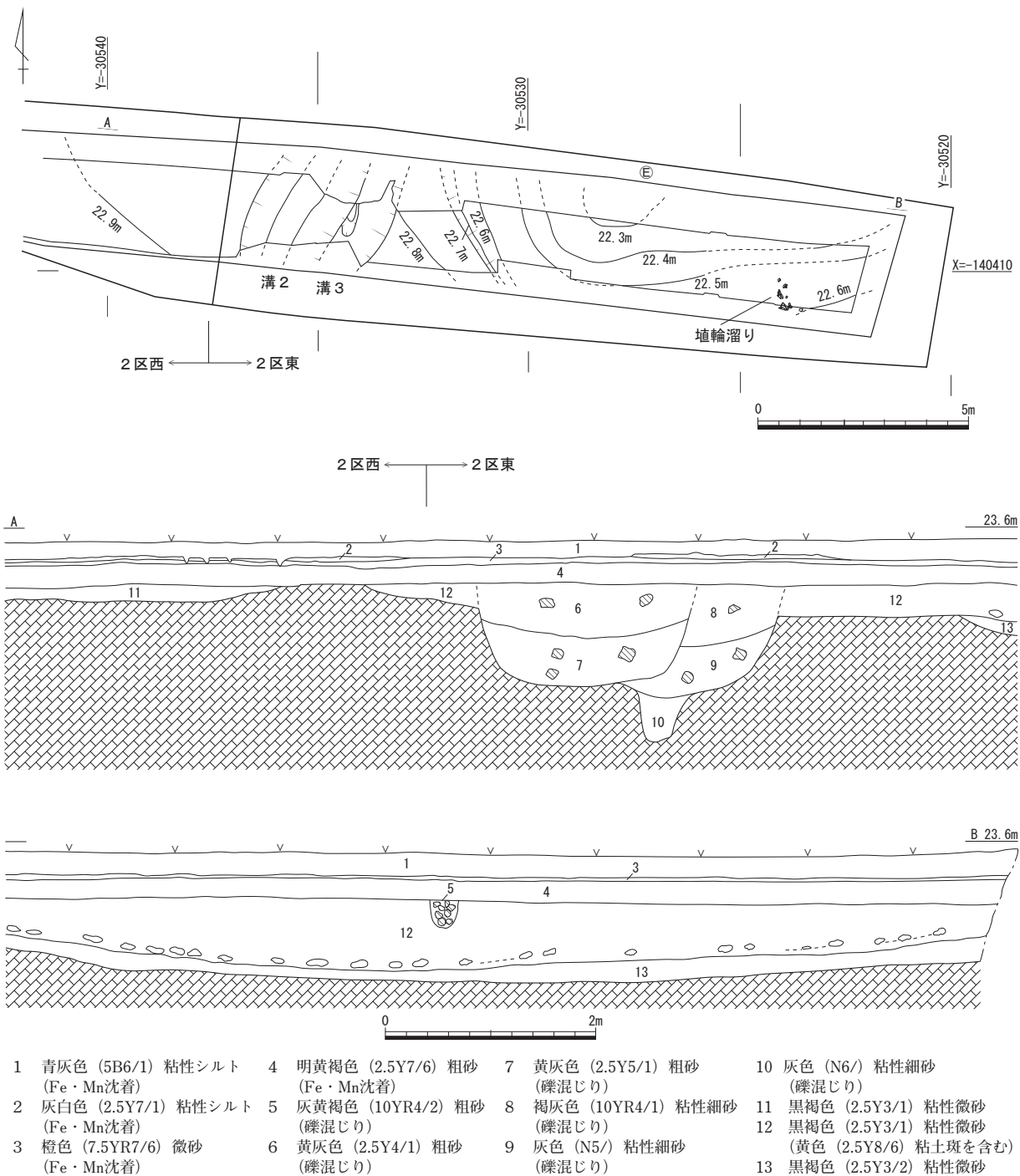


第8図 1区西側C—D断面図 (1/60)



第9図 1区東側平・断面図 (1/150・1/60)

溝2・3より東では、地山面は平面図の柱状図⑥へ向かって窪む地形となっている。第12層がこの窪地上に最大0.7mの厚さで堆積している。第12層中で第13層との境付近に見られる楕円形の層群は、黄色粘土斑である。性格は不明だが、帯状に堆積することから人為的ではない可能性が高い。第13層には埴輪片は含まないが、器種不明の土師器小片を含み、朱千駄古墳以前の古墳時代包含層と考えている。窪地と第13層の解釈については、周辺に集落遺跡が確認されてないことからさらに検討を要する。第10図平面図の東端部で、第4層中に盾持ち人形埴輪101~104、盾形埴輪105・106・108が集中して出土しており、埴輪溜りとしてその位置を示している。これ以外にも2区東で形象埴輪が出土し(107・109~113)、その原位置が不明であるにしても留意すべきである。(氏平)



第10図 2区東側平・断面図 (1/150・1/60)

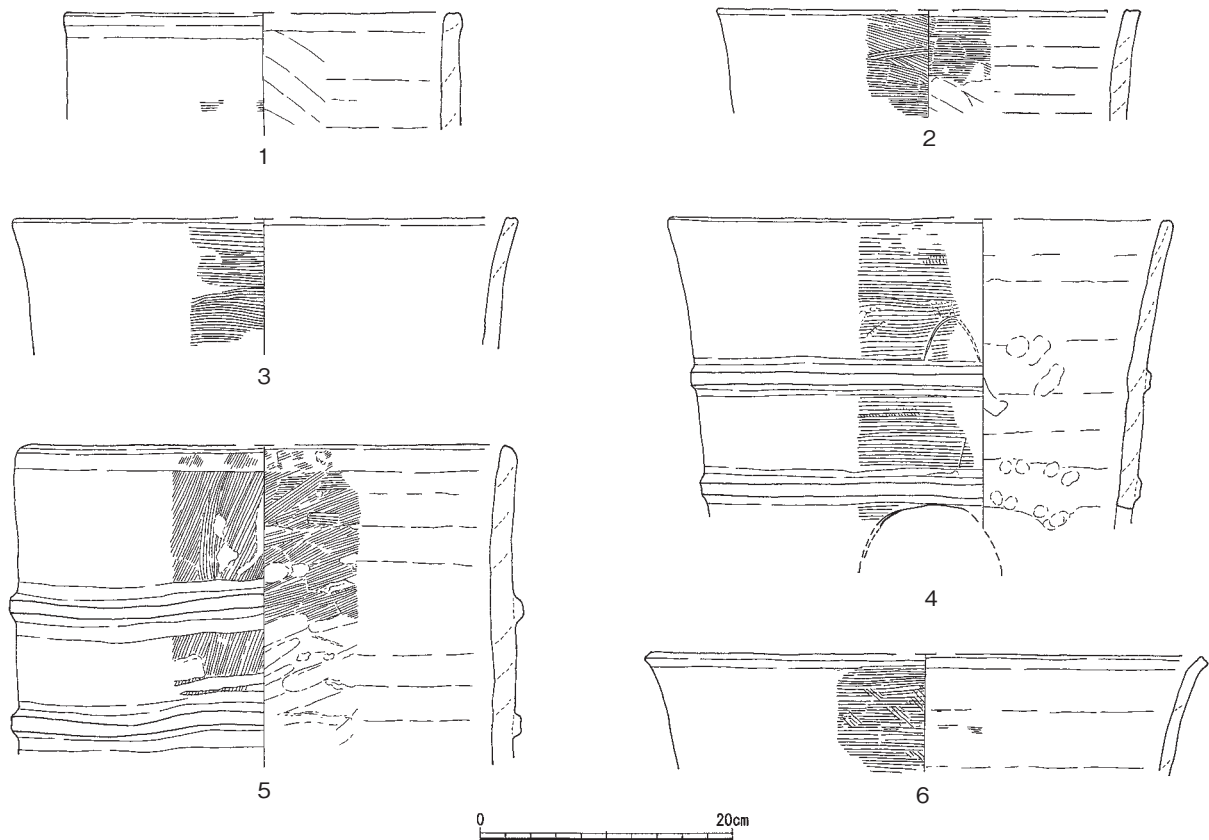
第3節 遺物

1 埴輪

今回の調査ではコンテナ箱にして67箱分の埴輪が出土している。そのうち図示したものが総計134点である。本項ではこれら埴輪について報告する。なお、分類については別節を設けて論じることとし、ここでは各埴輪の概要について記述する。

(1) 円筒埴輪

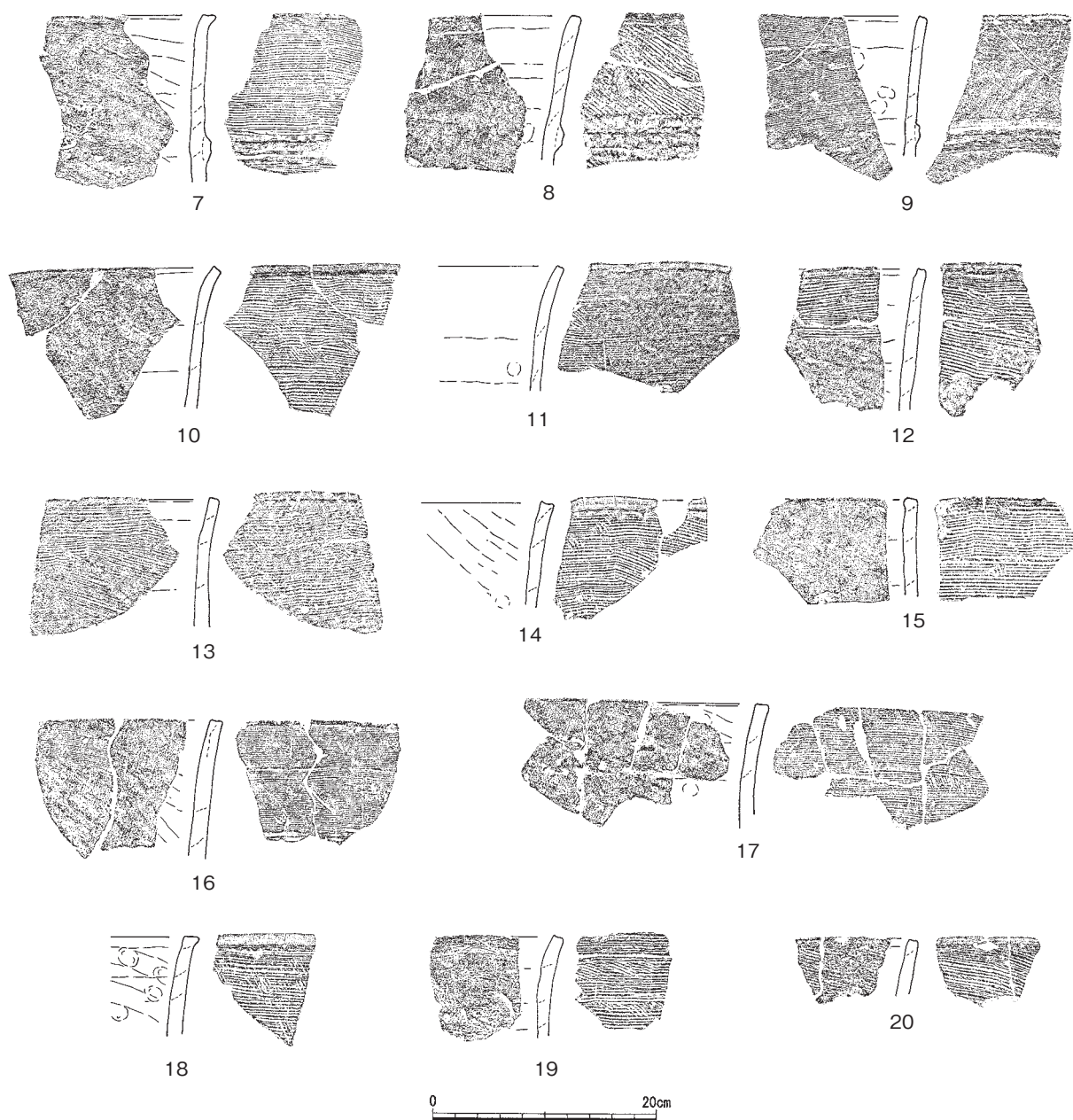
第11・12図は円筒埴輪の口縁部を図示している。口縁部は大きく分けて口径30cmほどの小型のものと40cmを超える大型のものとの二者がある。さらに口縁部の形状に着目すると、直立し、口縁端を上方へ向けるものと、やや外反し、口縁端部を外側へ向けるものとの二者が認められる。このうち、直立するものは、口縁端部をM字形に仕上げるものと、口縁端外側を嘴状に突出させるものがある。また、外反させるものは、口縁全体を外側へ緩やかに広げるものと、途中から角度を変え、やや大きく外反させるものとの二者がある。1～5は口縁端部を上方に向けている。1・2・4・6は外面調整として2次ヨコハケが用いられている。いずれの個体も明確な静止痕跡を見いだしがたく、いわゆるB種ヨコハケではないことに注意したい。また、4・5に見るように、口縁部高が12cm程度を測るものと、10cm程度に収まるものとの二者が存在する。4には放射線を描くヘラ記号が記されている。この個体を見る限り、透かし孔は口縁部より1段空けて穿孔されていることがわかる。5は2次調整が欠落し、



第11図 円筒埴輪 1 (1/6)

1次成形タテハケのみで製作が終了している。ハケの痕跡は直下段と連続しており、複数段を一度に成形していることがわかる。7~20も引き続き円筒埴輪の口縁部である。7・18は口縁端部を嘴状に突出させている。ほぼ全ての個体に2次調整ヨコハケが用いられているが、8のみナメハケとなっている。7・11・16ではB種ヨコハケが用いられている。静止痕跡が直立する、Bc種ヨコハケ¹である。後述するとおり、筒部にはBd種ヨコハケが認められるにもかかわらず、口縁部には一切用いられていない点も指摘しておきたい。

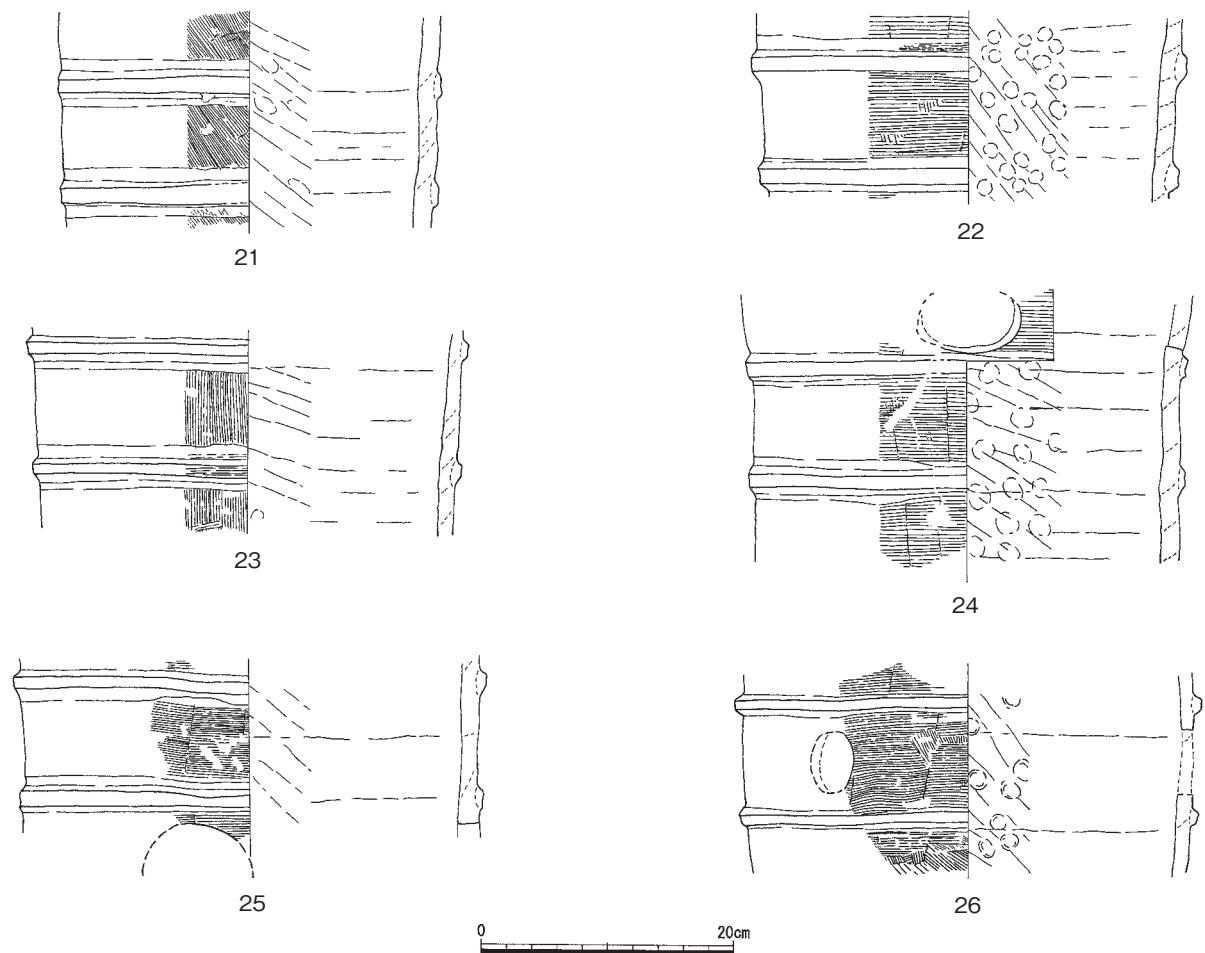
なお、その他の個体の2次調整ヨコハケは、明確な静止痕跡をもたず、ハケ同士が短いストロークで切り合いを見せている。口縁部の内面調整はいずれもナデ調整のみである。左ナメ上方向になで上げられている個体が大半である。一部に指押圧痕跡が認められる。8・9に見るように、突帯裏に残されていることが多いことから考えて、突帯貼り付けの際に、内面にも指を添えて、押圧効果を高めたものと考えたい。



第12図 円筒埴輪 2 (1/6)

第13・14図には円筒埴輪の筒部を掲載した。筒部についても径30～35cmを測る小型と、40cmを超える大型の二者が存在している。突帯間の高さは6.8～7.6cmの間に収まり、かなり狭い。偏差が1cm以内に収まることから見て、規格性の存在を認めて良いであろう。加えて、突帯の断面形状には、指3本を用いて突帯頂部を強くなでつけM字形を呈するものと、ナデのあまい台形を呈するものの二者が認められる。

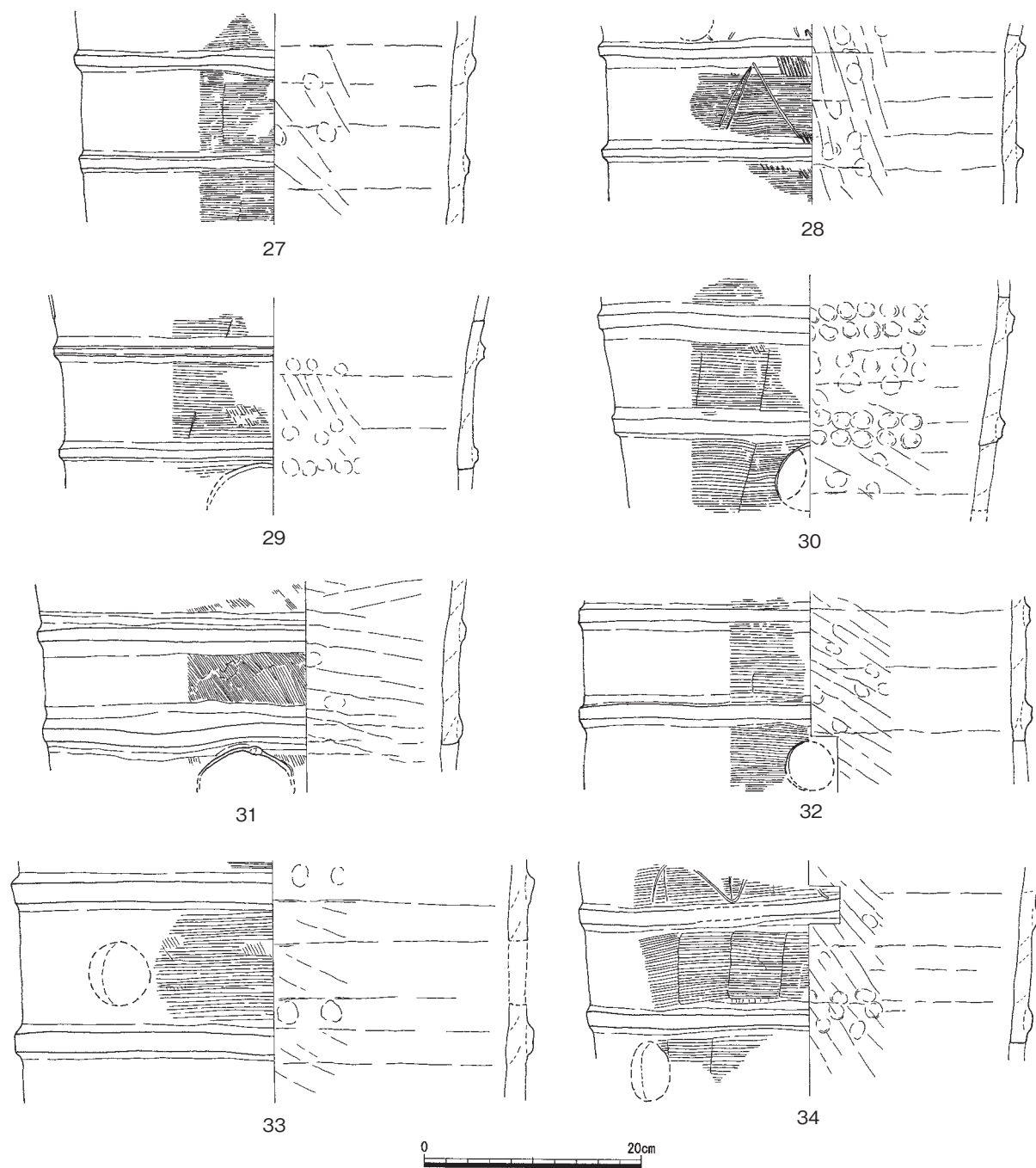
21～26は小型品である。外面調整は21の左ナナメハケ、23のタテハケが認められる以外は、全て2次調整ヨコハケが認められる。注意しておきたいのは、22に見るように、短いストロークで明確な静止痕跡を持つものと、静止痕跡の見られない長いストロークのヨコハケが併用されている点である。また、23は完全なタテハケとなっているが、後述するとおり、形象埴輪の基部にこの種のハケが用いられていることから、形象埴輪の基部である可能性を指摘しておきたい。なお、23の突帯剥離痕跡を観察すると、割り付け痕跡が認められない。いわゆる突帯間設定技法²を消失しているのにも関わらず突帯間の距離に規格性が認められる点は不可解と言えるだろう。24は2次調整ヨコハケとしてB c種ヨコハケが用いられているが、良く観察してみると部分的に静止痕跡がナナメに残るB d種ヨコハケと併用されている事がわかる。以上のように、朱千駄古墳出土の円筒埴輪に見る2次調整ヨコハケは多様であることが判明する。先に指摘したとおり、突帯形状には二者が認められるのであるが、25・26は高さ0.9cm、断面は台形を呈する。その他は高さ0.6cm程度、突帯下底も2.6cm内外と、低平かつ大



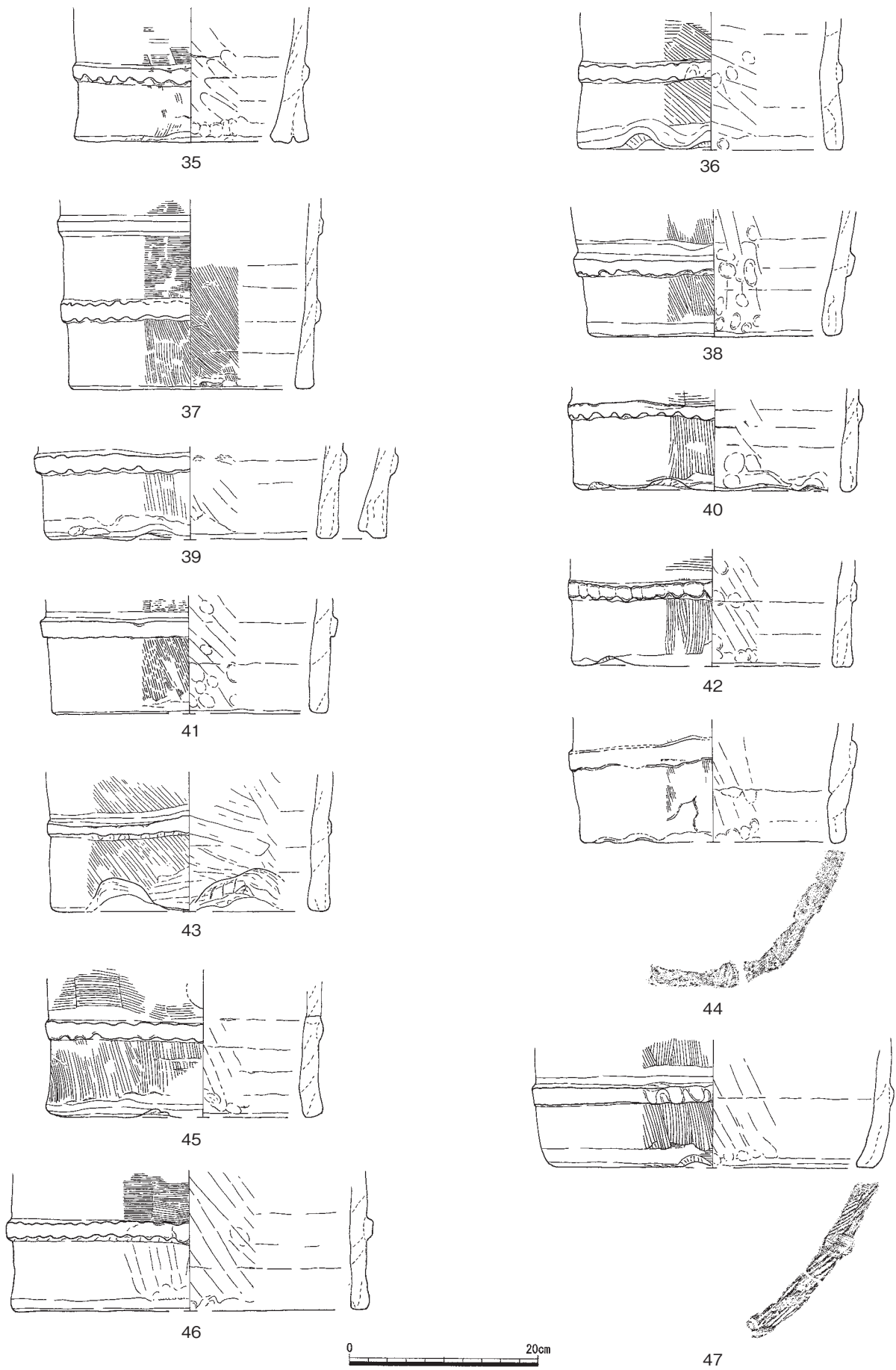
第13図 円筒埴輪 3 (1/6)

ぶりなものが目立つようである。

29・31・32・33・34は直径40cm内外を測る大型品である。岡山県内における朱千駄古墳に先行する古墳の内、大型品が認められるのは金藏山古墳³、造山古墳⁴、作山古墳⁵の3古墳である。いずれもが各期を代表する大首長墳であることを勘案すれば、本古墳の特異性は明らかであろう。さて、製作技法に見る限り、小型品と大型品の間に、明確な差異は見いだしがたい。器壁の厚さは、いずれも1.6~2.0cmを測り、かなり厚い。31に見るように、外面調整ナメハケが複数段をまたいで施されることを思えば、段ごとの突帯貼り付けが行われず、いわゆる小工程⁶の消失を指摘することができるだろう。なお、小型品、大型品とも透かし孔の形状は、いびつな楕円形を呈するものと、正円形を呈するものの2つが認められる。突帯間の平均高は7.2cmを測る。



第14図 円筒埴輪 4 (1/6)



第15図 円筒埴輪5 (1/6)

第15図には、円筒埴輪、朝顔形埴輪、あるいは形象埴輪の基底部を図示した。基底部にも直径25cm内外の小型品と、35cmを超える大型品が認められる。口縁部径（小型品：30cm・大型品：40cm超）、筒部径（小型品：30～35cm・大型品：40cm超）、基底部径は概ね対応関係にあると見て良い。以上より、朱千駄古墳において小型品と大型品の埴輪が併用して樹立されていたと考える。また、基底部高は平均で7.2cmを測り、突帯間の平均高と同じである。

ここで基底部をよく観察してみると、41・44に見るように、底面に粗朶の痕跡が認められる。さらに36・43・47に見るように、めくれ上がったような痕跡を残している。これらのことから、基底部の制作台の上に、粗朶が敷かれ、埴輪と制作台の固着を防いでいるだけでなく、まだ乾燥しきっていない段階で、棒状の工具を用いて埴輪を制作台から持ち上げ、別の場所へ移動させたと考える。おそらく、短期間で大量に埴輪の制作を行うため、製作場所と乾燥場所を別に設けたものと推察したい。

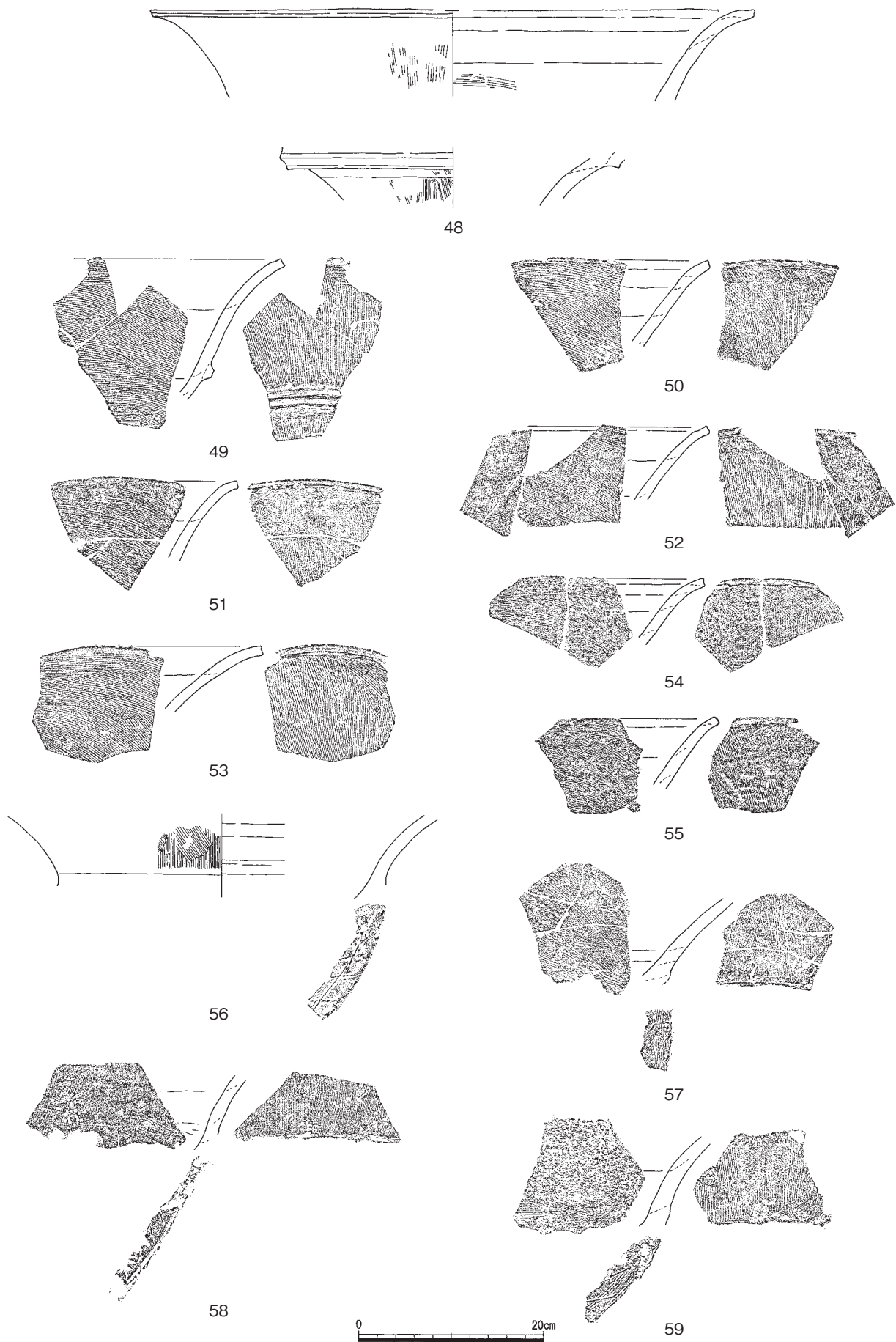
なお、最下段の突帯には、全て押圧技法の採用が認められる。押圧技法は、埴輪の第1段突帯に板状工具による調整を施したものとされてきたが⁷、近年では基本的な突帯成形技法の1つと考える意見⁸が大勢である。そうだとすると、ほぼ全ての埴輪に押圧技法の痕跡が残ることは異様である。ここで本古墳における押圧技法の特徴を挙げれば、突帯の上下がそれぞれ波打つもの（36・37・42・45・46）、突帯の下側のみ波打ち、上側は直線的になでられたもの（35・38・39・40・41・43・47）、完全に押圧され、不整形な形を示すもの（44）の三者が存在する。うち、上側を直線的になでたものが数量的には卓越している。このナデ痕跡は割り付け工具の使用痕跡である可能性もある。だが、上段の突帯との対応関係は不明であり、可能性を指摘するに留めたい。なお、上下に波打つのは、粘土紐を人差し指と親指を用いて垂直に器壁に押しつけた際の痕跡である。これは藤井幸司の「貼付技法A類⁹」に相当する。本古墳の出土円筒埴輪の突帯が全体的に見て低平かつ、幅広であるのは、押圧技法による突帯成形が、全面的に採用されているためと考える。

（2）朝顔形埴輪

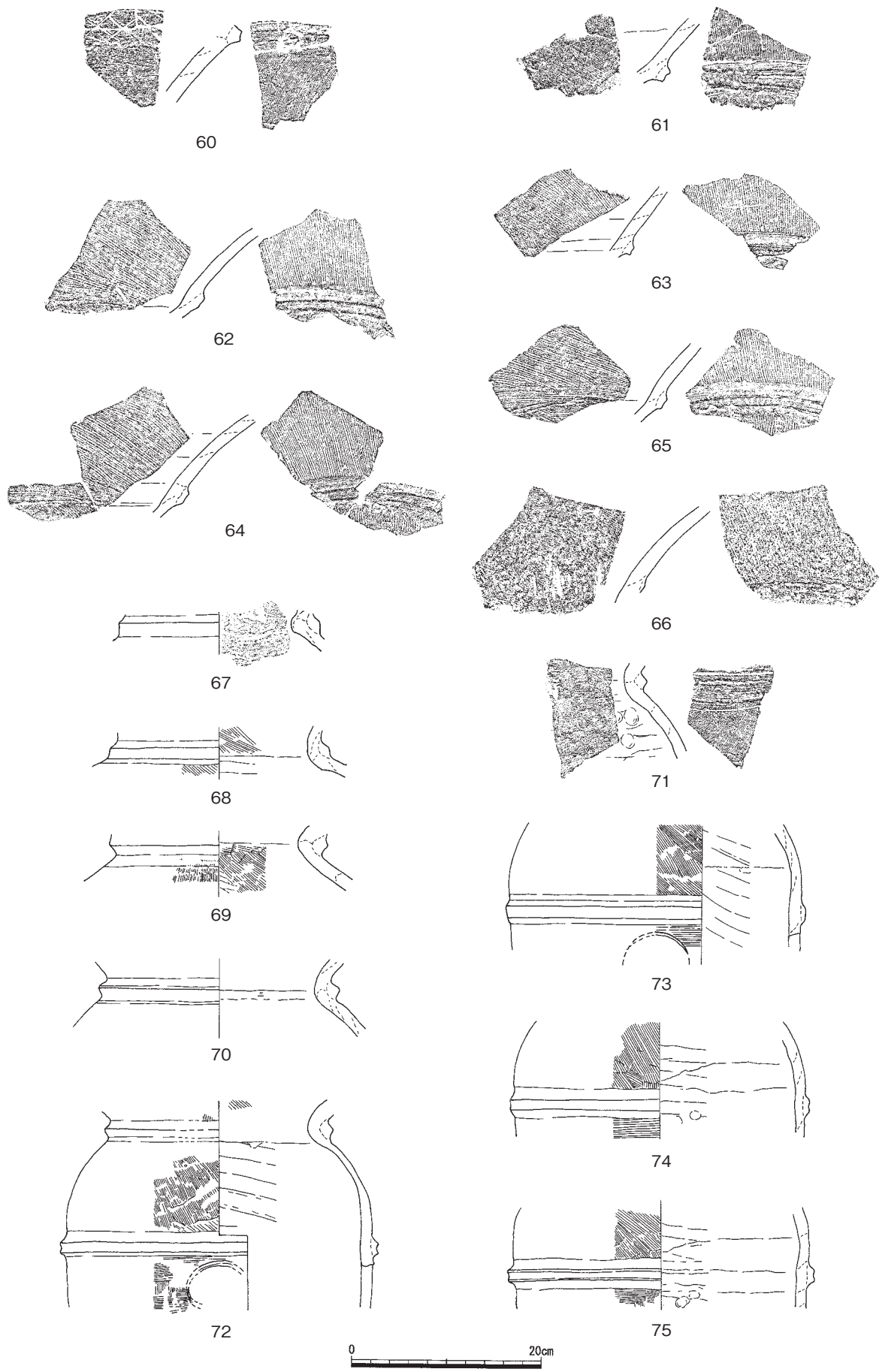
第16・17図には朝顔形埴輪を図示した。朝顔形埴輪の口縁部は大きく分けて、外側へ向かって大きく反りを見せ、端部を外側へ向けるもの、直線的に立ち上がるものの二者が存在する。このうち48は唯一全形の把握が可能な個体である。口縁部は外側へ向かって大きく反り、端部を完全に外側へ向けている。口径は66cmを測る。49～56も、朝顔形埴輪の口縁部の破片である。朝顔形埴輪の口縁部の厚さは1.0cm程度であり、円筒埴輪の器壁の厚さと比較すると薄い。先述したとおり、本古墳の出土埴輪は小工程を省略しつつ、短期間に製作された可能性が高い。そのため、自重によるへたりを防ぐべく、このように薄い口縁部を載せたものと思われる。また、朝顔形埴輪の口縁部内面には、例外なくハケ調整が行われている。内外面ともハケにより成形することで、粘土紐を薄く引き延ばし、器壁の薄さ、重量の軽さの両方を達成しているものと思われる。なお、56・58・59の口縁部第1段との接合部分には、格子形に器壁を傷つけた痕跡が残る。

60～66は朝顔形埴輪の口縁部第1段部分にあたる。ここでその突帯の形状を見ると、台形状に1.0cm近く突出するものと、0.5cm程度の低いものの二者が見られる。両者に製作技法の違いはない。いずれも、口縁部第1段と第2段の接合後に突帯の貼り付けが行われている。

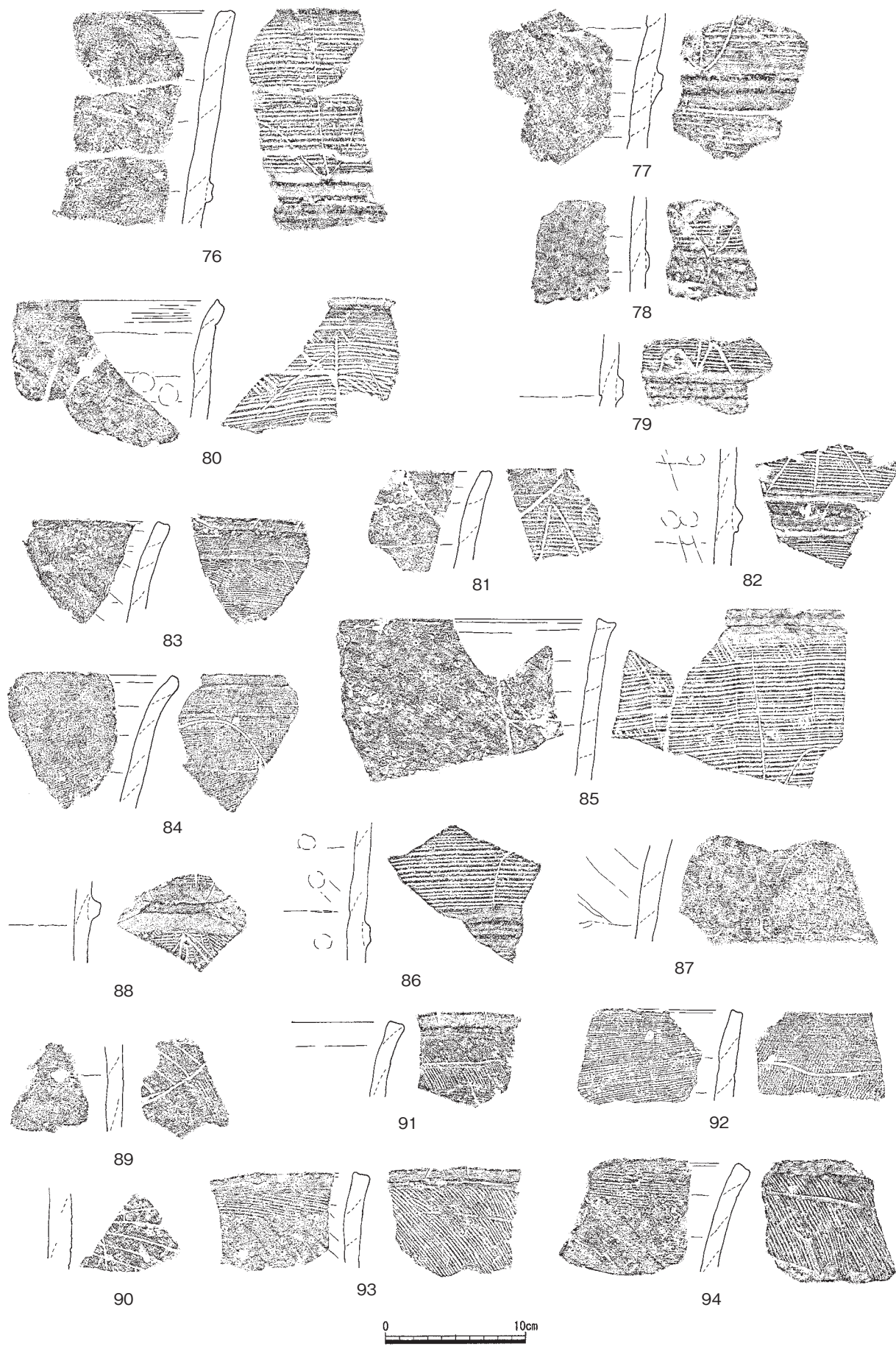
67～75は朝顔形埴輪の肩部から筒部にかけての破片である。くびれ部径は20cm内外に収まり、筒部径は最大でも30cm程度と小さい。すなわち、円筒埴輪の小型品の中に、少なからずの朝顔形埴輪が存在していることになる。



第16図 朝顔形埴輪 1 (1/6)



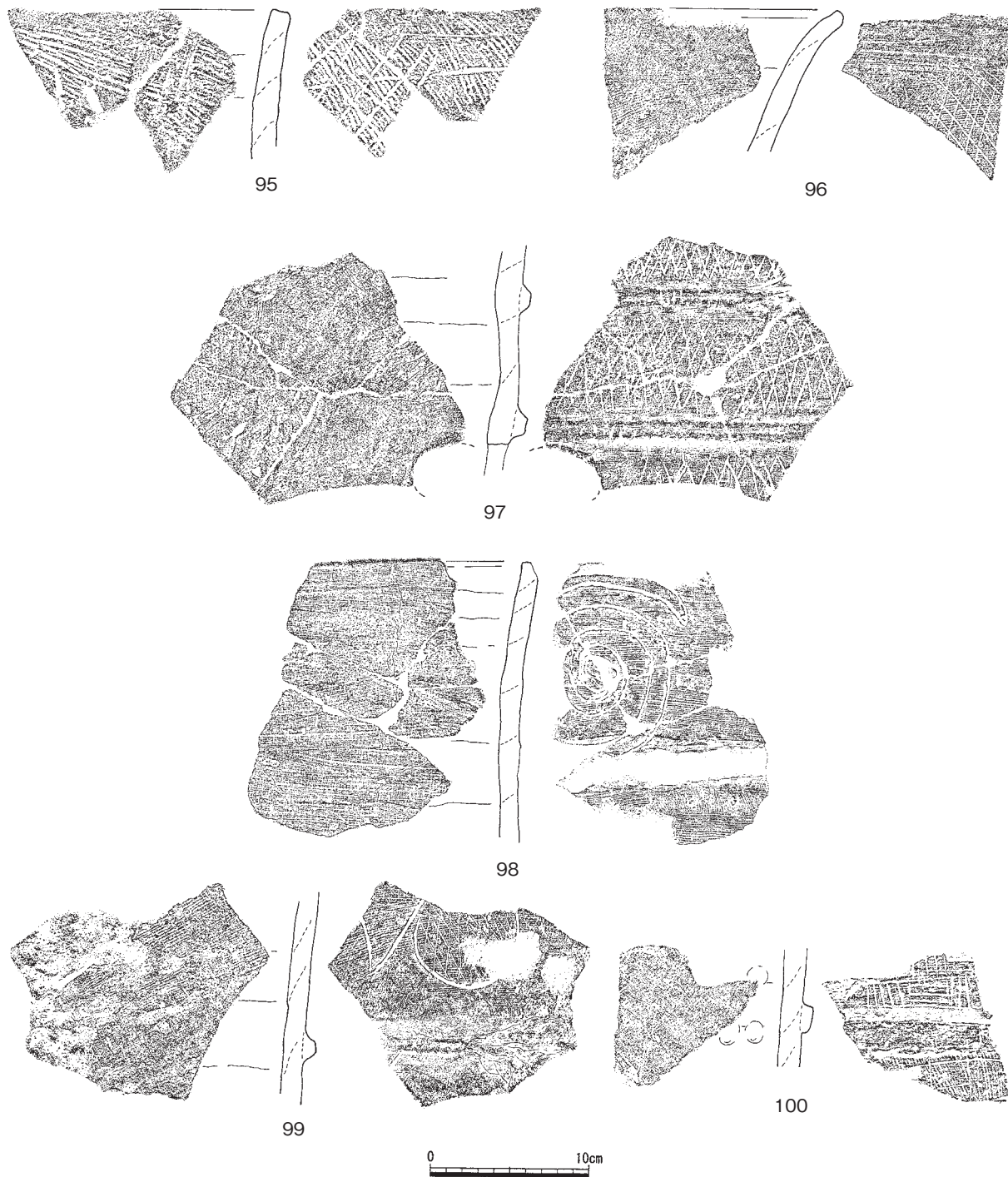
第17図 朝顔形埴輪 2 (1/6)



第18図 線刻をもつ円筒埴輪 1 (1/4)

(3) 線刻を持つ円筒埴輪

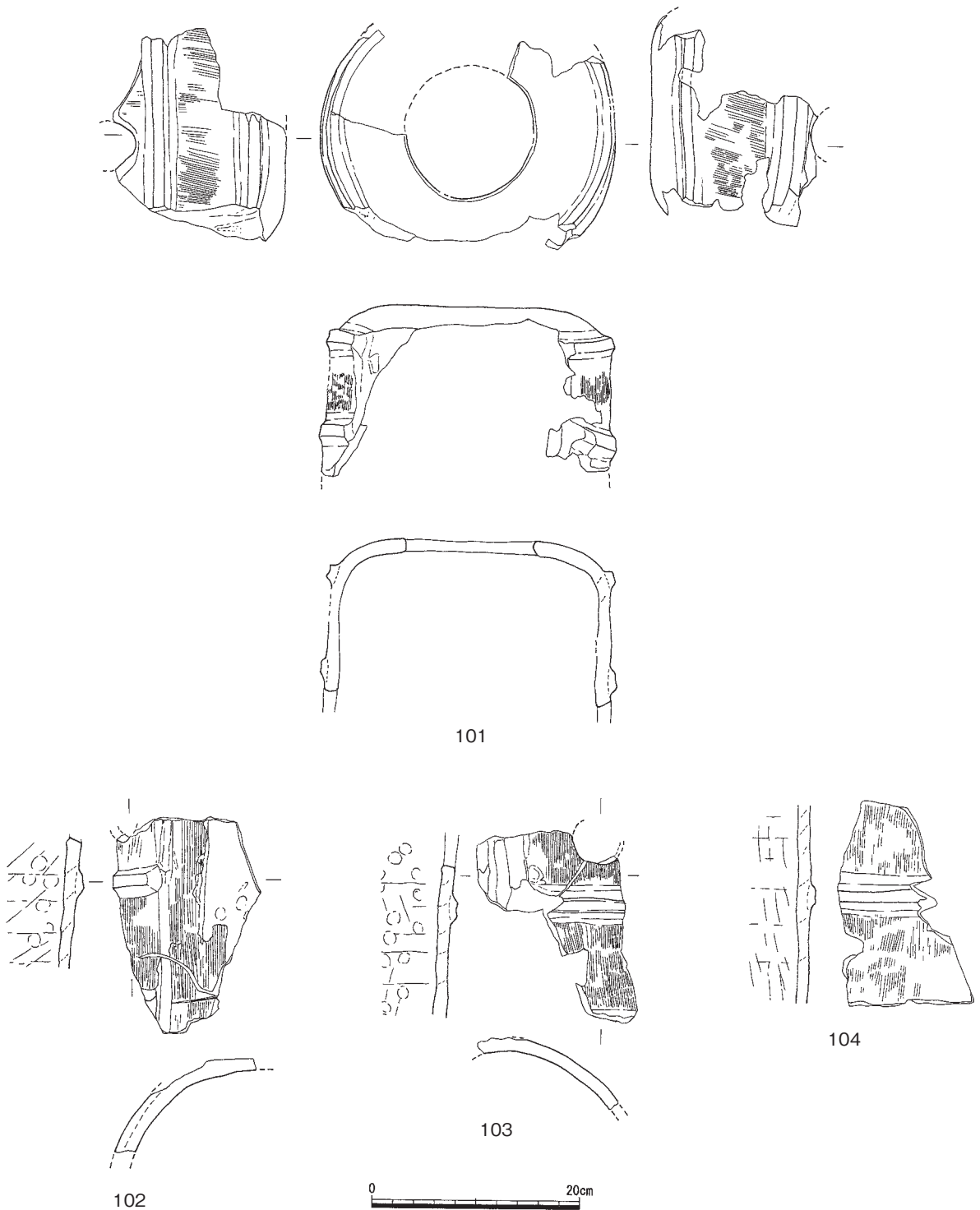
第18・19図には線刻を持つ円筒埴輪を図示した。朱千駄古墳の円筒埴輪には多種多様な線刻が認められる。第1に76・77・78・79・85に見るように、下向き矢印形の線刻を持つものが挙げられる。第2に80・81・82・88に見るように上向きの矢印を描くものである。第3は83・84・86・87に見るように放物線を描くものである。第4は95～97に見る格子形を描くものである。最後にこれらのいずれの類型にも属さない、巻雲形(98)、丸に格子形(99)、網代形(100)を描く特殊な類型が存在している。線刻を描く部位は口縁部がほとんどであるが、97など筒部の複数段にわたって施される例も存在している。



第19図 線刻をもつ円筒埴輪2 (1/4)

(4) 形象埴輪

今回の調査では、これまで朱千駄古墳では未発見であった形象埴輪が出土した。このうち器種が判明したものとして盾持ち人形埴輪、盾形埴輪と人物形埴輪がある。これらを第20・21図に図示した。101は盾持ち人形埴輪の円筒形基部にあたる。円筒形基部とは、盾持ち人形埴輪の胴体部分にあたる。向かって正面に盾部を貼り付けるため、あらかじめ製作していた円筒部の突帯を切り離し、表面をなでつけて平滑にする、「事前調整¹⁰」が行われている。透かし孔は、対向するように穿孔されている。筒部は垂直方向のハケにより成形されており、他の埴輪とは異なる。頂部は平坦に成形され、その中



第20図 形象埴輪 1 (1/6)

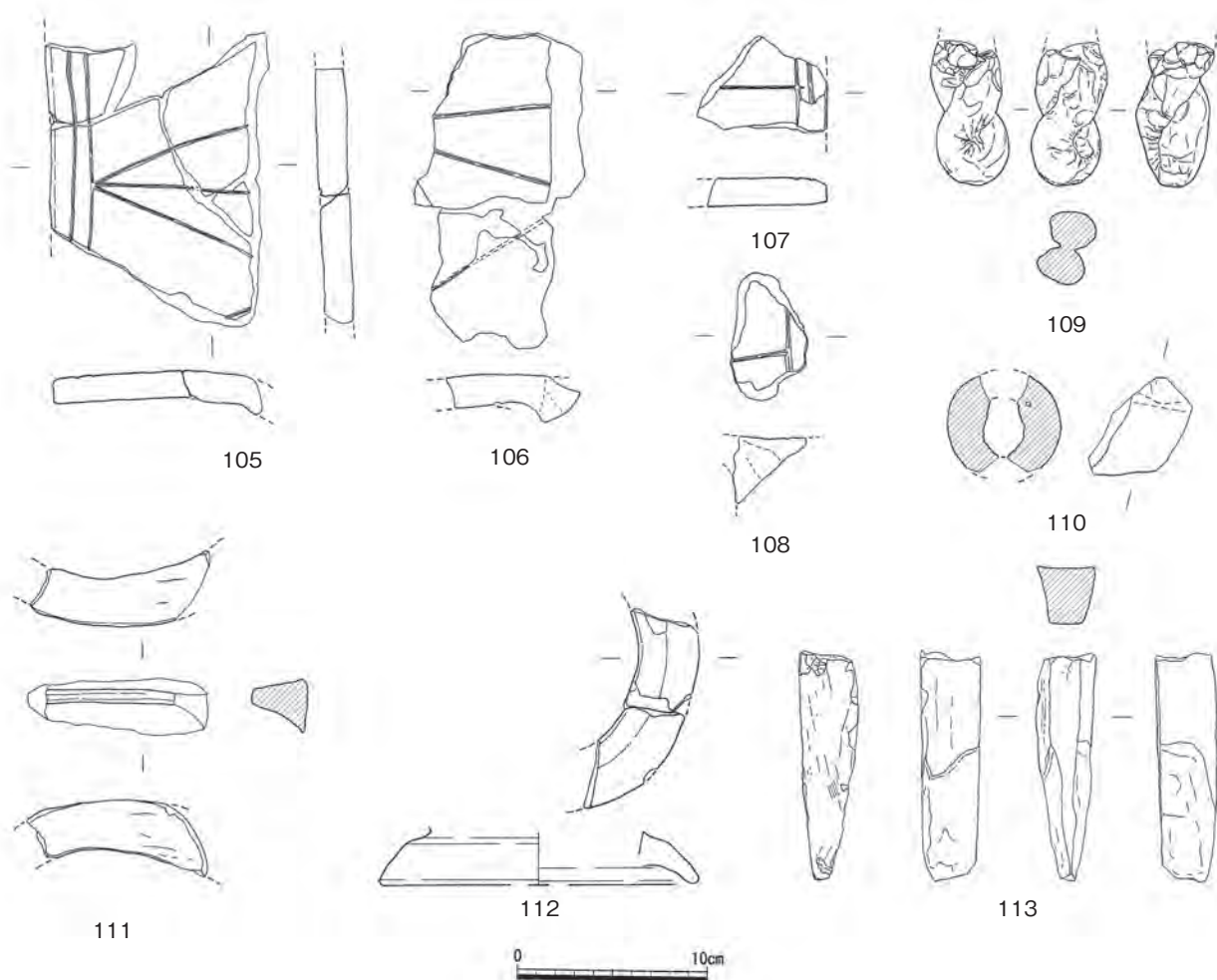
中央には直径13cmを測る円孔が空けられている。通常の盾形埴輪の口縁部は斜めに切り落とされるか、とっくり形に成形される。そのため、この円孔に別造りした頭部を差し込む盾持ち人形埴輪であったと考えたい。なお、102~104は「事前調査」の痕跡やハケ成形の特徴から101と同一個体と考える。105~108は盾部の破片である。その文様は垂線により分割される三角形である。

109は粘土紐をS字形に編み込んだ形状を呈する。上部にオサエの痕跡が認められることから、人物形埴輪の角髪の一部と判断した。ただ、通常の角髪は8字形にまとめる事が多く、本例はやや特殊な類型にあたる。その他、110~113は器種不明の形象埴輪である。

第22図は胎土分析を行った埴輪片である。これらの詳細については、後節にゆずる。 (和田)

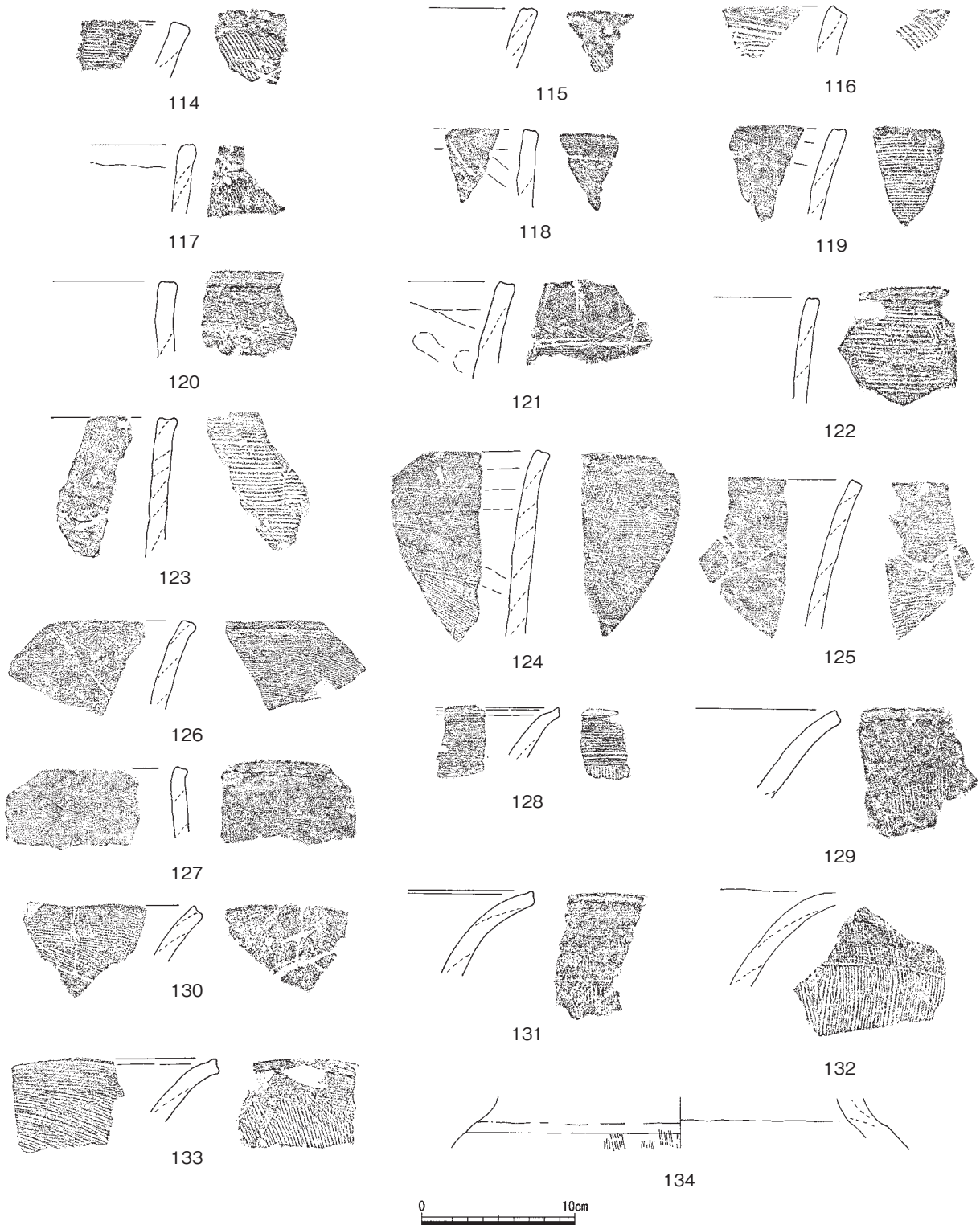
註

- 1 一瀬和夫「古市古墳における大形古墳埴輪集成」『大水川改修に伴う発掘調査概要・V』 大阪府教育委員会 1988
一瀬和夫「円筒埴輪」『考古資料大観4 弥生・古墳時代 埴輪』 小学館 2004
- 2 辻川哲朗「突帯—突帯間設定技法を中心として—」『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』 第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 2003
- 3 西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』 倉敷考古館研究報告 第1冊 倉敷考古館 1959
他にも、岡山大学考古学研究室蔵の大型円筒埴輪の報告がある。
『金蔵山古墳—後円部墳端の調査—』 岡山市教育委員会 2008
- 4 安川 満「岡山市所蔵の造山古墳出土埴輪」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』 第3号 岡山市教育委員会 2011
- 5 『国指定史跡 作山古墳測量調査報告』 総社市教育委員会 2016



第21図 形象埴輪 2 (1/4)

- 6 a 川西宏幸「円筒埴輪総論」『古墳時代政治史序説』 嶋書房 1988
 なお、小工程中にかならずしも突帯貼り付けや2次調整ヨコハケが施されないことについては、藤井幸司が指摘している。
- b 藤井幸司「円筒埴輪製作技術の復元的研究—窖窯焼成導入以降を中心に—」『埴輪—円筒埴輪製作技法観察・認識・分析—』 第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集 2003
- 7 註6 a 文献
 8 註6 b 文献
 9 註6 b 文献
 10 和田 剛「形象埴輪からみた造山第2号古墳」『造山第2号古墳』 岡山市教育委員会 2000

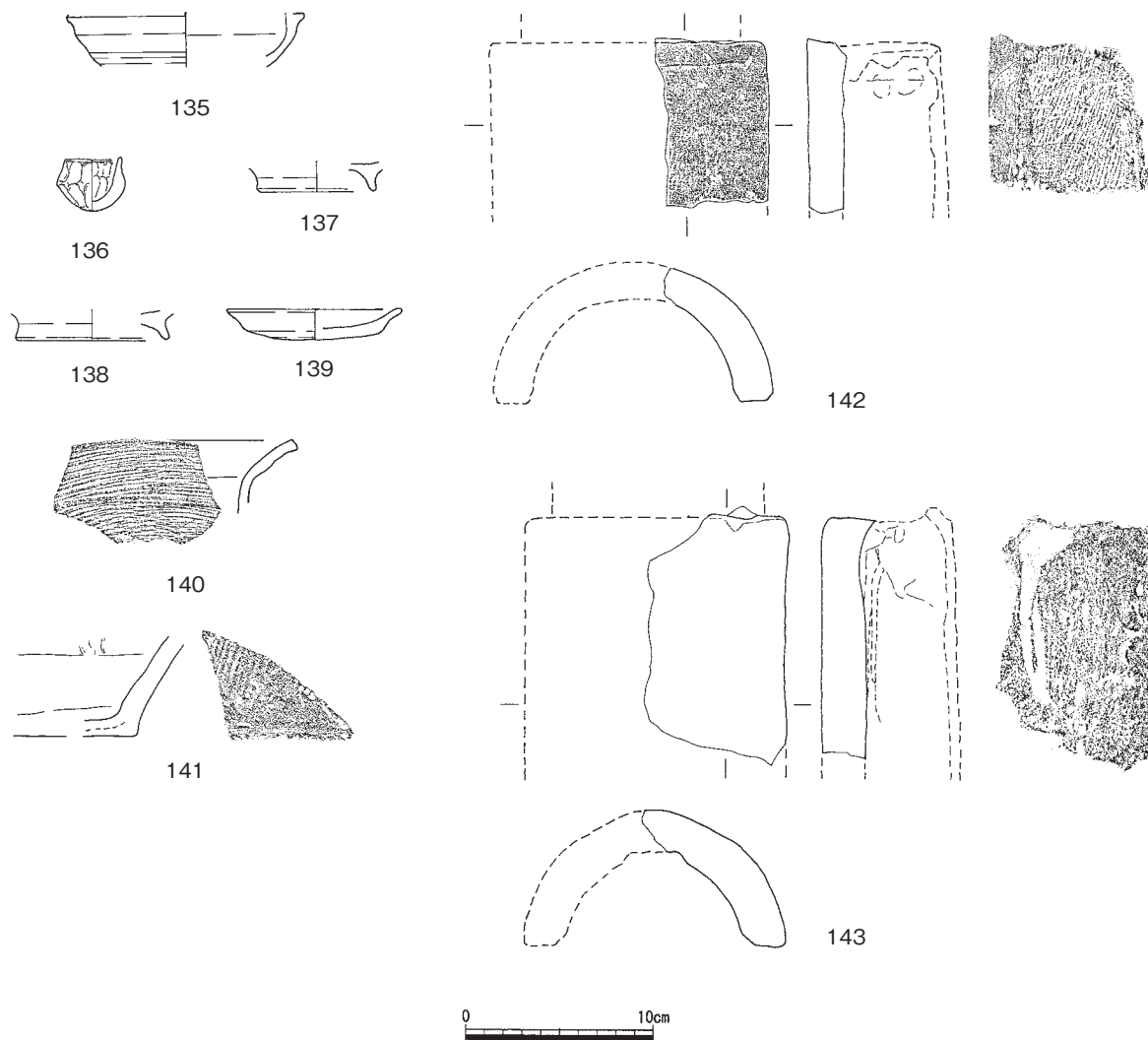


第22図 胎土分析埴輪 (1/4)

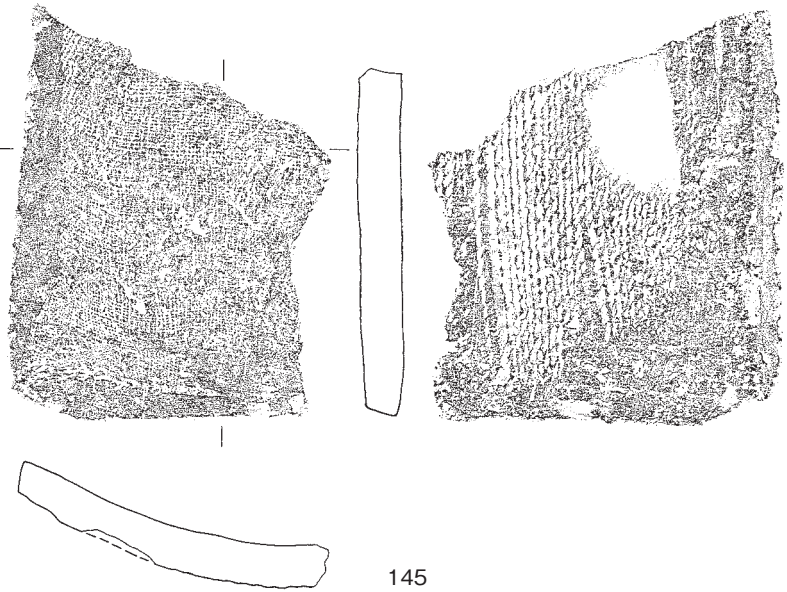
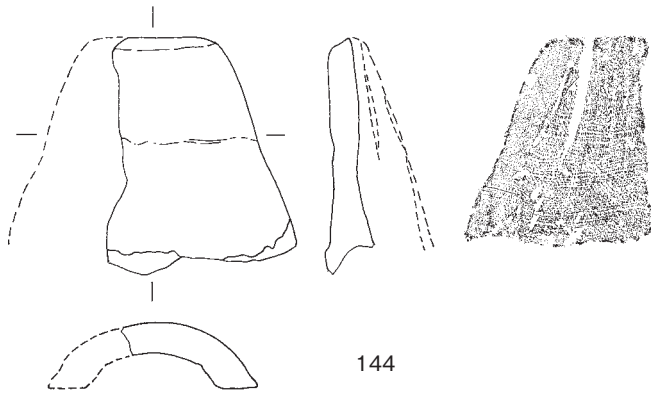
2 須恵器・土師器・瓦

ここでは、第9～12層（第6図）及び溝2・3（第10図）から出土した埴輪を除く遺物を報告する（第23～25図、図版6）。須恵器杯身135は墳丘から離れた2区東の第9層で出土した。今回の調査では同器種唯一となるが、古墳の時期決定に耐えうる資料が判然としない。同層からは中世の土師器鍋140も出土している。手づくね製の土師器鉢136は後円部に近い1区西の第11層から出土した。中世の土師器碗137・138は1区東の第11層、土師器皿139、須恵器甕141は溝2・3から出土した。

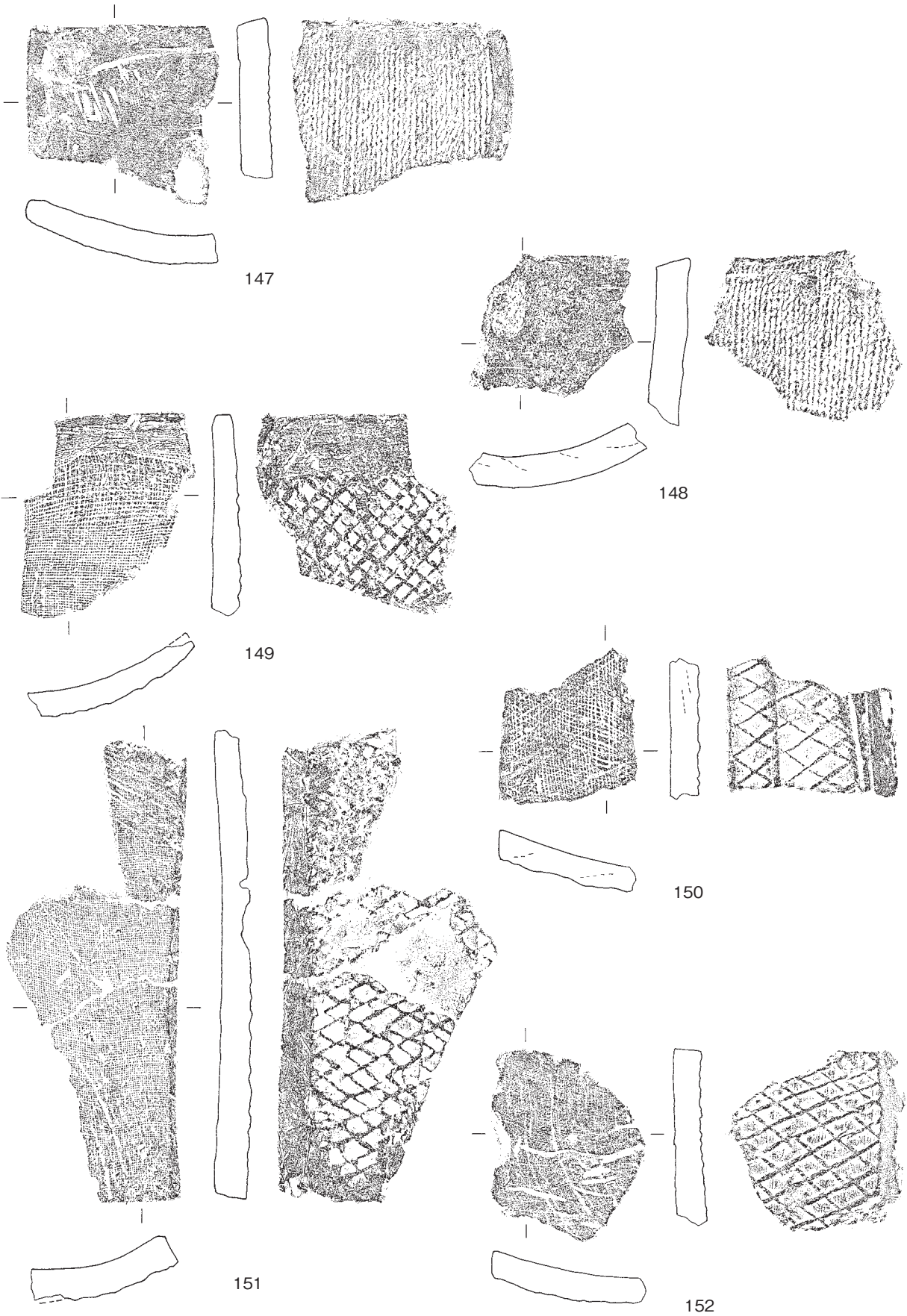
142～144は玉縁式の丸瓦と思われ、142は須恵質、143・144は土師質である。凸面には丁寧なナデを施すが、142には一部縄目が認められる。凹面には布目が見られる。145～152は平瓦であり、145・147～149は須恵質、146・150～152は土師質である。このうち、145～148は凸面縄目叩きであり、145・146にはやや太い縄目が認められ、148は他と比べて縄目が明瞭である。凹面には布目を消すようにナデを施す。一方、149～152は凸面格子叩きであり、149には方形格子目、150・151には菱形格子目、152には平行四辺形を呈する大小の格子目が認められる。このうち、150の表面には叩き板による段差が生じている。凹面には布目残り、150～152には糸切り痕が認められる。出土状況からこれらの瓦片は、近接する備前国分尼寺等で用いられたものが、破碎後に四散したものと考えられる。（澤山）



第23図 須恵器・土師器・瓦 1 (1/4)



第24図 瓦2 (1/4)



第25図 瓦3 (1/4)

第4章 自然科学的分野における鑑定・分析

第1節 朱千駄古墳出土埴輪の胎土分析

岡山理科大学 白石 純

1 分析目的

砂川中流域に位置する朱千駄古墳出土の朝顔形・円筒埴輪の胎土と、周辺古墳出土の埴輪胎土を比較し、砂川中流域の各古墳出土埴輪の胎土による類似や差異から、この地域の埴輪の胎土の特徴を検討した。

2 分析方法、分析試料

分析方法：エネルギー分散型蛍光X線分析計（日立ハイテクサイエンス社製SEA5120A）

測定条件：管球ターゲットRh、励起電圧は50kV・15kV・7kV、管電流は4 μ A～1000 μ A、測定時間は300秒、雰囲気は真空中で測定した。

分析試料：3g程度の試料を乳鉢で粉末にしたものを加圧成形機で約15 t の圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって、一部破壊分析である。

また、胎土中の含有鉱物についても肉眼観察ではあるが検討した。

3 分析結果

蛍光X線分析結果

測定した元素（酸化物）は、 SiO_2 、 TiO_2 、 Al_2O_3 、 Fe_2O_3 、 MnO 、 MgO 、 CaO 、 Na_2O 、 K_2O 、 P_2O_5 の10成分である。この胎土分析では、 CaO 、 K_2O の2成分に顕著な違いがみられたことから、この成分を用いて散布図を作成し、胎土の違いを検討した。第26図 K_2O - CaO 散布図では、朱千駄古墳内出土埴輪の器形別の比較を行った。その結果、 CaO 量の違いで大きく2つの胎土に分類できる。 CaO 量が約1.1%～1.3%に分布するAグループで、試料番号5、6、13、17、21の5点である。また、それ以外の埴輪は CaO 量が約0.38%～0.8%に分布するBグループである。なお、朝顔形と円筒の器形による胎土の違いは明確にはないようである。第27図 K_2O - CaO 散布図では、朱千駄古墳周辺の古墳から出土した埴輪と胎土を比較した。比較した埴輪は、小山古墳、森山古墳、廻り山古墳、穂崎亀池散布地出土のものである。その結果、 CaO 量の違いで、3つの胎土に分類できる。 CaO 量が約1.0%以上には、朱千駄（Aグループ）と小山（1）、穂崎亀池が、また CaO 量が約0.8%～1.0%の間には森山、小山が、そして約0.8%以下には朱千駄（Bグループ）と廻り山が分布した。

胎土中の砂粒観察結果

胎土中の肉眼による砂粒観察では、朱千駄（Aグループ）、穂崎亀池表面採集（写真3）、小山（1）

の埴輪には、角閃石（0.5mm以下）が少量観察された（写真2）。また、朱千駄（Bグループ）の胎土中では、石英、長石以外に僅かな黒雲母が観察された（写真1）。

4 まとめ

以上の分析結果から、以下のことが推定される。

- ・朱千駄古墳出土の埴輪が2つの胎土にわかれた。そこで胎土中の砂粒などを観察したところ、CaO量が多いAグループには、少量の角閃石砂粒が観察できた。つまり、この角閃石が含まれていることでCaO量が多くなったと考えられる。
- ・周辺の古墳出土埴輪との比較では、CaO量が多いAグループは、穂崎亀池散布地と胎土が類似しており、焼成も須恵質であった。また、朱千駄古墳と森山古墳の胎土が異なっていたが、廻り山古墳とは胎土が類似していた。

以上の分析結果より、朱千駄古墳出土の埴輪には、二種類の胎土があることがわかった。そしてAグループとした埴輪は穂崎亀池散布地の埴輪と胎土が類似していることから、この散布地で生産された埴輪が供給された可能性が考えられる。また、朱千駄古墳と森山古墳の埴輪胎土が異なっていた。このように砂川中流域の古墳出土埴輪には複数の胎土があることが想定された。

この分析の機会を与えて頂いた澤山孝之氏をはじめ岡山県古代吉備文化財センター、赤磐市教育委員会の方々にはお世話になった。記して感謝いたします。

参考文献

白石 純・赤澤昌典・小林博昭「埴輪の胎土分析（I）－岡山県内出土の円筒埴輪の分析を中心に－」『自然科学研究所 研究報告第28号』岡山理科大学 2002

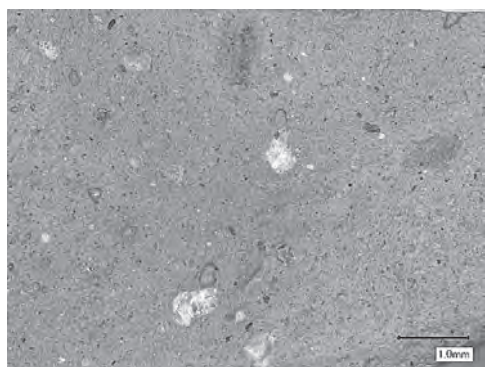


写真1 朱千駄古墳出土埴輪No.10 (Bグループ)
白色砂粒：石英

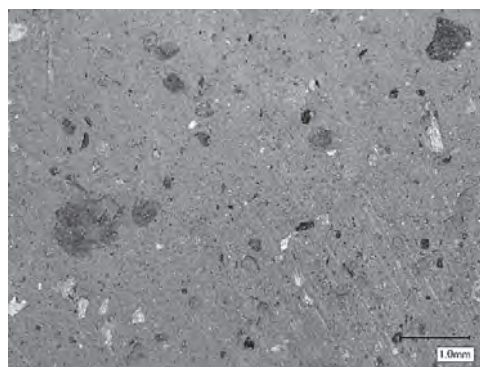


写真2 朱千駄古墳出土埴輪No.13 (Aグループ)
白色砂粒：石英、黒色砂粒：角閃石

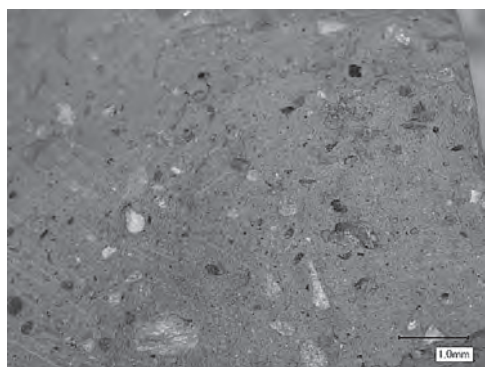
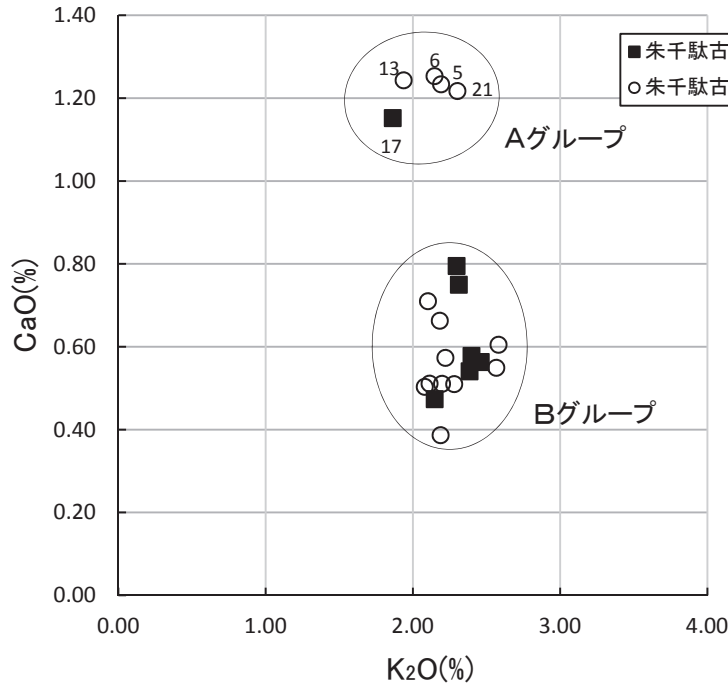
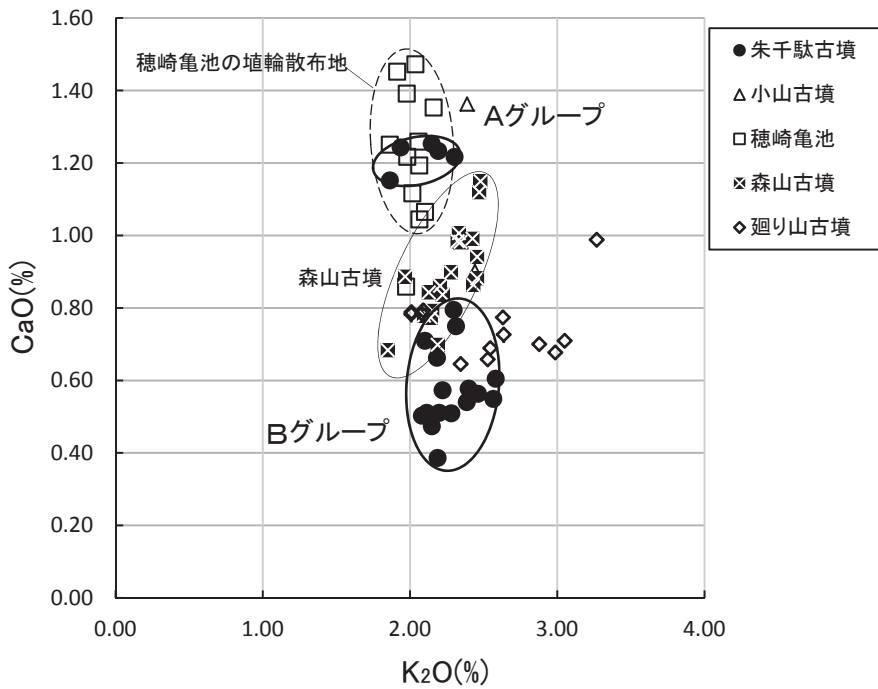


写真3 穂崎亀池散布地出土埴輪No.1
白色砂粒：石英、黒色砂粒：角閃石



第26図 朱千駄古墳出土埴輪胎土比較



第27図 朱千駄古墳と周辺古墳出土埴輪の比較

表2 埴輪胎土分析一覧表 (%)

試料 番号	掲載 番号	遺跡名	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P
1	117	朱千駄古墳	円筒埴輪	66.95	1.34	18.59	7.54	0.10	2.12	0.60	0.00	2.58	0.06
2	115	朱千駄古墳	円筒埴輪	65.69	1.42	19.00	8.71	0.12	2.11	0.51	0.00	2.28	0.06
3	125	朱千駄古墳	円筒埴輪	69.31	1.20	17.23	7.12	0.03	2.04	0.57	0.11	2.22	0.06
4	116	朱千駄古墳	円筒埴輪	70.78	1.14	16.39	6.27	0.02	1.95	0.55	0.18	2.57	0.05
5	126	朱千駄古墳	円筒埴輪	68.65	1.10	17.32	7.61	0.01	0.88	1.23	0.85	2.19	0.05
6	127	朱千駄古墳	円筒埴輪	68.34	1.08	17.41	7.41	0.04	1.17	1.25	0.99	2.15	0.05
7	121	朱千駄古墳	円筒埴輪	68.60	1.20	17.34	7.56	0.09	1.95	0.66	0.25	2.18	0.06
8	132	朱千駄古墳	朝顔形埴輪	69.15	1.25	17.22	6.58	0.07	2.09	0.56	0.46	2.46	0.04
9	131	朱千駄古墳	朝顔形埴輪	67.41	1.24	17.62	9.40	0.21	0.92	0.79	0.00	2.30	0.03
10	124	朱千駄古墳	円筒埴輪	69.15	1.22	17.21	7.45	0.06	2.15	0.51	0.00	2.11	0.03
11	119	朱千駄古墳	円筒埴輪	69.32	1.22	17.11	7.28	0.06	2.17	0.51	0.00	2.20	0.04
12	134	朱千駄古墳	朝顔形埴輪	68.80	1.11	16.56	9.12	0.17	0.79	0.75	0.00	2.31	0.27
13	118	朱千駄古墳	円筒埴輪	68.55	1.17	17.22	7.48	0.04	1.82	1.24	0.39	1.94	0.05
14	123	朱千駄古墳	円筒埴輪	69.75	1.26	16.53	7.29	0.05	2.11	0.39	0.30	2.19	0.04
15	114	朱千駄古墳	円筒埴輪	71.48	1.22	16.20	6.12	0.04	2.02	0.50	0.15	2.08	0.04
16	130	朱千駄古墳	朝顔形埴輪	68.14	1.31	17.84	7.70	0.07	2.16	0.47	0.00	2.15	0.05
17	133	朱千駄古墳	朝顔形埴輪	68.34	1.09	17.27	7.48	0.04	1.92	1.15	0.73	1.86	0.04
18	128	朱千駄古墳	朝顔形埴輪	69.42	1.17	16.97	6.39	0.04	2.50	0.54	0.45	2.39	0.04
19	120	朱千駄古墳	円筒埴輪	67.83	1.23	17.26	8.40	0.20	2.10	0.71	0.00	2.10	0.06
20	129	朱千駄古墳	朝顔形埴輪	69.99	1.24	17.19	6.43	0.03	1.98	0.58	0.00	2.40	0.06
21	122	朱千駄古墳	円筒埴輪	70.40	1.10	16.89	7.48	0.04	0.37	1.22	0.00	2.30	0.06
1	—	小山古墳	円筒埴輪	67.57	0.98	16.37	7.64	0.05	2.08	1.36	1.42	2.39	0.04
2	—	小山古墳	円筒埴輪	64.36	1.39	17.99	10.42	0.08	1.33	0.90	0.93	2.44	0.04
3	—	小山古墳	円筒埴輪	67.37	1.30	17.92	8.61	0.05	0.47	0.98	0.74	2.34	0.05
1	—	穂崎亀池	円筒埴輪	68.32	1.19	17.20	7.96	0.06	1.69	1.25	0.34	1.86	0.04
1	—	森山古墳	円筒埴輪	69.21	1.02	17.46	5.67	0.01	2.15	0.98	1.03	2.34	0.04
2	—	森山古墳	円筒埴輪	69.89	1.13	16.91	7.23	0.07	0.59	1.15	0.38	2.48	0.03
3	—	森山古墳	円筒埴輪	70.36	1.23	16.57	6.30	0.02	2.09	0.68	0.77	1.85	0.04
4	—	森山古墳	円筒埴輪	70.10	1.17	16.74	6.14	0.05	2.10	0.77	0.66	2.14	0.05
5	—	森山古墳	円筒埴輪	71.35	1.08	15.40	5.68	0.02	1.98	0.84	1.30	2.22	0.04
6	—	森山古墳	円筒埴輪	68.58	1.11	17.64	6.17	0.00	2.19	0.94	0.76	2.46	0.03
7	—	森山古墳	円筒埴輪	69.98	1.14	16.54	5.93	0.04	2.16	0.86	0.99	2.20	0.04
8	—	森山古墳	円筒埴輪	69.53	1.31	17.88	6.62	0.05	0.84	0.88	0.26	2.46	0.06
9	—	森山古墳	円筒埴輪	69.03	1.00	17.34	5.92	0.00	2.10	1.01	1.12	2.33	0.05
10	—	森山古墳	円筒埴輪	70.58	1.13	16.41	5.97	0.02	1.97	0.89	0.91	1.97	0.04
11	—	森山古墳	円筒埴輪	71.28	1.24	16.27	6.23	0.06	1.46	0.78	0.43	2.10	0.04
12	—	森山古墳	円筒埴輪	68.59	1.48	18.61	7.17	0.03	0.61	0.70	0.47	2.19	0.04
13	—	森山古墳	円筒埴輪	67.28	1.17	18.34	6.54	0.04	2.38	0.98	0.80	2.32	0.04
14	—	森山古墳	円筒埴輪	71.39	1.08	15.62	5.76	0.02	1.89	0.84	1.13	2.13	0.03
15	—	森山古墳	円筒埴輪	68.04	1.31	19.64	7.29	0.03	0.21	0.86	0.00	2.43	0.04
16	—	森山古墳	円筒埴輪	70.67	1.21	16.28	5.78	0.01	2.10	0.79	0.82	2.15	0.06
17	—	森山古墳	円筒埴輪	67.95	1.19	18.57	6.97	0.07	1.48	1.12	0.01	2.47	0.06
18	—	森山古墳	円筒埴輪	68.95	1.30	18.25	6.10	0.05	1.14	0.99	0.62	2.42	0.07
19	—	森山古墳	円筒埴輪	72.20	1.04	15.03	5.74	0.06	1.62	0.90	0.99	2.28	0.04

第5章 総括

第1節 調査の成果

今回の調査の基本土層は、現代の耕作土以下、中世以降の造成土、古代～中世初頭の包含層、地山となっている。1区東と2区東で朱千駄古墳以前と想定した包含層を確認したが、いずれも自然堆積と考えた。最も古墳に近い1区西でも、朱千駄古墳由来の包含層は確認できないことから、古墳の墳端を示す直接の証拠は判然としない。ただし、1区西で検出した地山の傾斜変換は、平面では現存の後円部からくびれ部と近似するラインを示すことから、古墳の墳形の影響であるかもしれない。

今回の調査で検出した溝1～3は、いずれも中世と想定した。また、あくまで調査区内での傾向ではあるが、流路方向が現在の朱千駄古墳前方部前面のラインに斜行している。したがって、これらの溝をもって朱千駄古墳に周濠が存在していたと解釈することは難しく、判断は今後の調査に委ねたい。

第29図は調査区と古墳の関係を断面図で示したものである。A－B断面では、1区西の地山面傾斜変換ラインから約8m南で現存の墳丘端に達する。現在の調査区内付近に墳端が存在すると仮定すると、現在の県道上にある程度の高さの墳丘が存在していたと想定することもできよう。

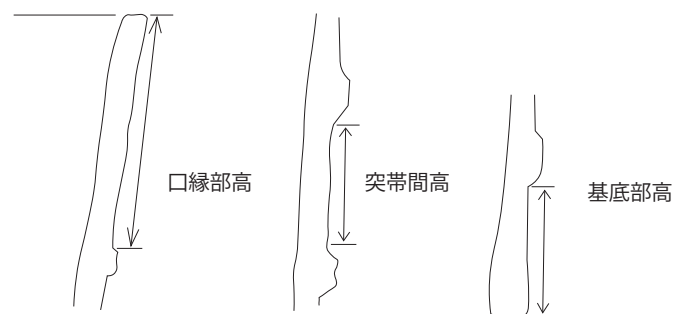
C－D断面・E－F断面を見ると、調査区が墳丘からは離れすぎていると見られ、調査区内に墳端を想定することは困難である。ただ、2区東でも箱数にして10箱の埴輪片が出土したことから、墳丘には豊富な量の埴輪が樹立されていたことが窺える。(氏平)

第2節 埴輪について

ここでは今回の調査で出土した埴輪について分類を試みる。その上で、周辺古墳との比較を行い、その年代的な位置づけや、埴輪製作技術の特徴について考えていきたい。なお、埴輪各部位の計測位置については第28図に示した。

1 埴輪の分類について

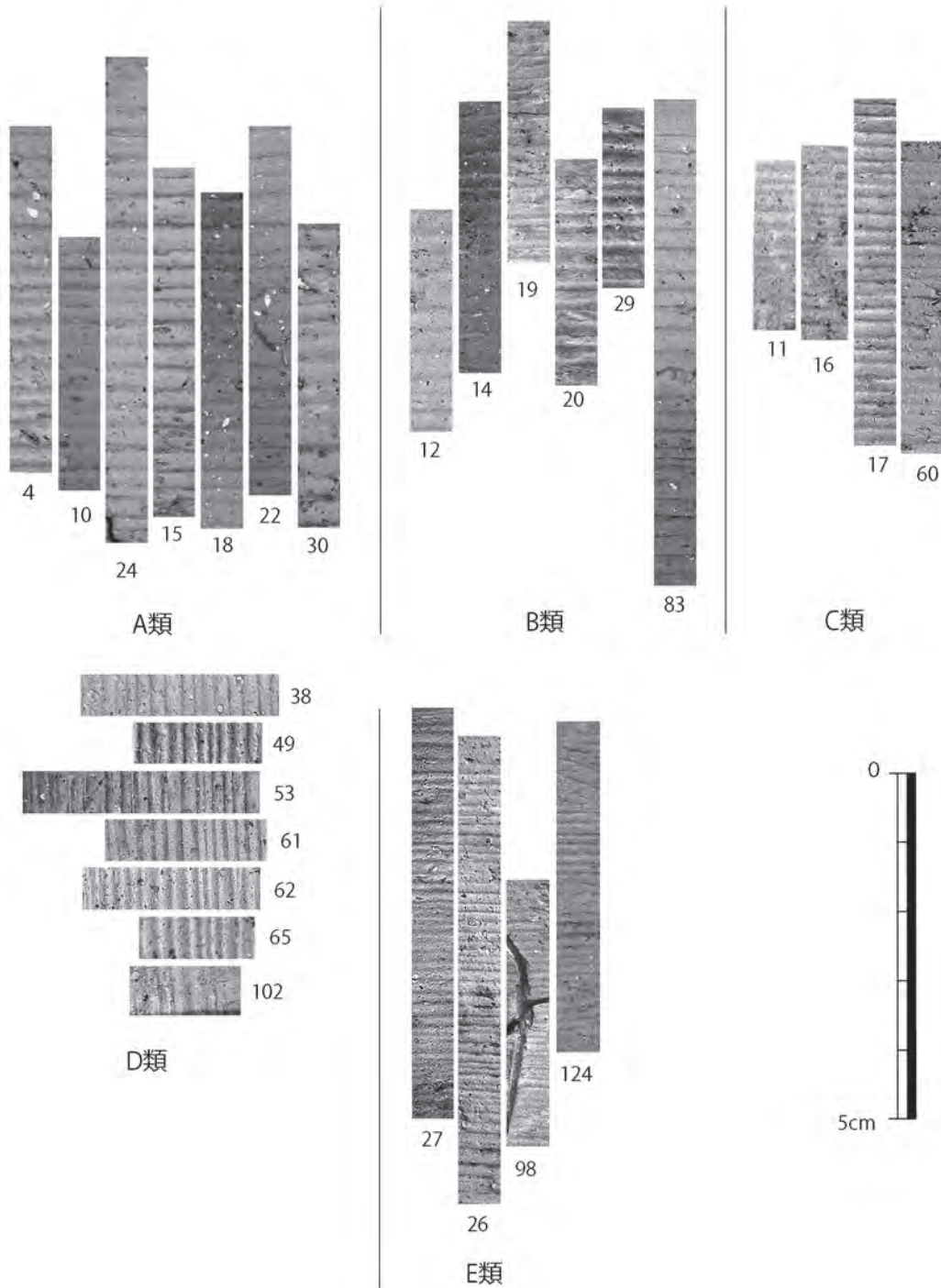
第3章第3節1 埴輪の項において述べたとおり、今回の調査で出土した埴輪には小型品と大型品の2種類が認められた。しかし、大きさを復元可能な個体は図示した埴輪の28%に留まり、分類の基準には向かない。そこで、ここでは器壁に残るハケパターンを抽出し、これを元に分類を試みた。検討の結果、A～Eの5種類に分類すること



第28図 各部位計測凡例



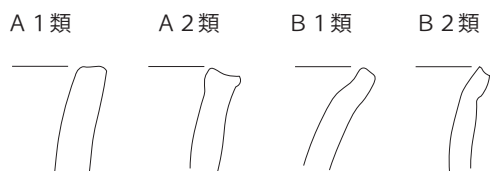
第29図 調査区・朱千駄古墳周辺平・断面図 (1/2,000・1/400)



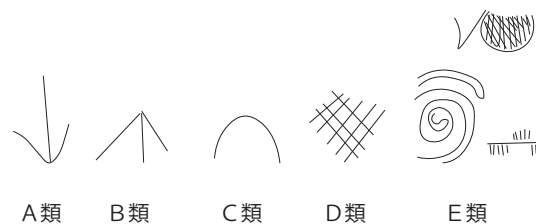
第30図 ハケパターン分類図 (1/1)

が可能であった (第30図)。図示したとおり複数の個体間でハケパターンの一致が見られる。ハケの条数に着目すると、A類は1cmあたり3～4本、B類は3～5本、C類は5本、D類は4～7本、E類は8～10本をそれぞれ数える。これらにもとづいて出土した埴輪を1～5類に分類した(表3)。標本数は85個体である。以下はこれを参照しつつ、各類型について述べていく。

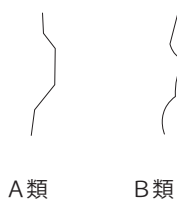
まず、分類の基準となる他の要素について述べる。まず口縁の形状について改めて記述すると、口縁部を直立させ、端面を上方向に向けるものをA類とする。このうち、端部にナデ痕跡のみが見られるものをA1類、ナデた後に嘴形に端部を外につまみ出すものをA2類とする。B類は口縁部を外反させるものである。このうち、口縁部全体が緩やかに外反するものをB1類、口縁部の中位部分に境



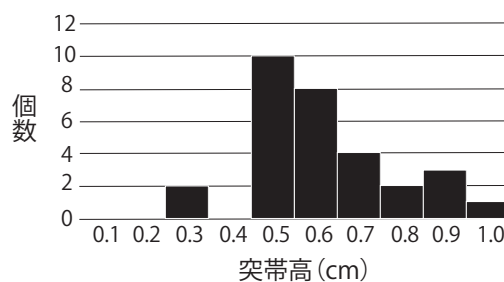
第31図 口縁部類型図



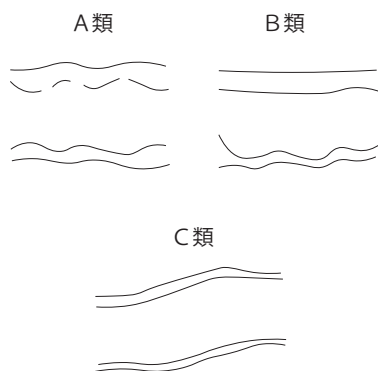
第32図 線刻類型図



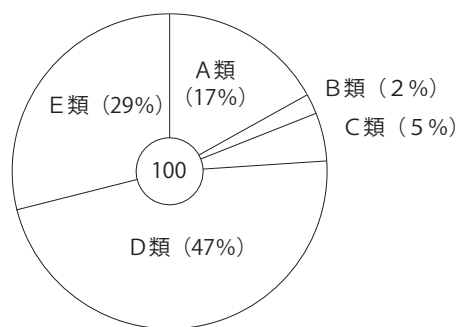
第33図 突帯形状類型図



第34図 突帯高数分布図



第35図 底部押圧類型図



第36図 外面調整類型図

を設けて強く反らせるものをB 2類とする (第31図)。また線刻についても既述したとおりで、A～Eの5類に分けた (第32図)。朱千駄古墳において特徴としてあげられるのは、E類に見る巻雲形、網代形などの存在である。突帯形状は、断面台形を呈するA類と端部を強くナデ、M字形を呈するB類の2つが認められる (第33図)。第34図には突帯高の度数分布を示した。平均は0.7cmであるが、高さ0.5cmを測る個体が最も多く、全体として突帯の高さは低い。第35図には底部押圧の類型を模式的に示した。上下が波打つ形状を示すA類と、上辺のみナデ痕跡を残すB類が存在する。なお藤井幸司の言う「線條の圧痕」を45において確認できた。これは本古墳における突帯成形が、押圧技法によることを示す。第36図には外面調整の類型を示している。これは筒部の類型であり、基底部は全て2次調整ヨコハケを欠いている。これによれば2次調整ヨコハケの静止痕跡を明瞭に残すB種ヨコハケ (A～C類) は4分の1に過ぎず、明確な静止痕跡を残さないD類が約半数近くと卓越している。また、すでに2次調整ヨコハケを欠く個体が3割近くを占めている点にも注目したい。次に、これら要素を総

合して抽出した、各類型の詳細について記述する。

1類 1類はハケパターンA類を施すものである。総計14個体が認められた。朝顔形埴輪や形象埴輪には見られないハケパターンで、円筒埴輪のみ認められた。基底部高の判明するものは42のみで7.1cmを測る。突帯間高は6.3～7.3cmを測る。口縁部の形状はA類が卓越する傾向にある。線刻はA類とB類が認められるが、B類の方が多い。突帯高は平均0.5cmと、低い部類にあたる。突帯下底の幅は平均2.2cmを測る。ただ、2.6cm測る個体が半数を占め、大ぶりがかつ低平な突帯形状をなすといえるだろう。外面調整は全て2次調整ヨコハケまで施している。なかでも静止痕跡を残さないD類が卓越している。

2類 2類はハケパターンB類を施すものである。全部で21個体あり、今回分類可能であった埴輪の中では最も多い。口縁部径40cmを超えかつ基底部径が35cmを超えるものが認められることから、大型品が含まれると見て良い。基底部高は6.8～8.2cmと幅がある。口縁部の形状はA類、B類とも認められるが、A類の方が多い。線刻はA～D類がそれぞれ認められる。最も多様な線刻を施す類型であるといえる。突帯高の平均は0.6cmを測る一方、突帯下底の高さの平均は2.1cmである。他の類型と比べて、突帯の突出度が高いといえる。外面調整は2次調整ヨコハケと明確な静止痕跡を残さないD類が多い（9個体）ものの、B種ヨコハケも見られ（8個体）、このうち全てが垂直方向に静止痕跡を残すB c種（A類）ヨコハケである。なお、2次調整ヨコハケを欠き、1次調整ナナメハケ（E類）のみとなる個体が3点ある。胎土はB類のものが2点確認できた。

3類 3類はハケパターンC類を施すものである。全部で16個体を識別可能で、そのうち4個体が朝顔形埴輪であった。円筒埴輪では口縁部径40cmを超える個体がある一方、基底部径は30cm以下の個体も見られ、小型品、大型品とも存在している。口縁の形状はA類とB類が拮抗している。基部高は6.6～7.2cm、突帯間高は6.9～7.5cmをそれぞれ測る。突帯高は0.3～0.8cmを測り、ばらつきが認められる。外面調整は2類同様、2次調整ヨコハケまで施すものが大半で、明確な静止痕跡の見られないD類が多いものの、その他は全てB c種（A類）ヨコハケである。胎土はA・B類共に見られた。

4類 4類はハケパターンD類を施すものである。この類型において特筆すべきは、17個体のうち13個体が朝顔形埴輪であり、かつ、盾持ち人形埴輪を2個体含んでいることである。明らかに器種に偏在が見られ、朝顔形埴輪と形象埴輪に特化した製作状況を想定することが可能である。円筒埴輪が2個体見られるが、33は大型品である。朝顔形埴輪が小型品にしか認められないことから考えて、多様な規格の埴輪が見られる類型と言える。突帯高は0.5cm内外に、突帯下底も1点を除けば幅2.6cmに収まる。外面調整は他の類型同様にD類が多い。なお、既述したとおり盾持ち人形埴輪と思われる102、103は垂直方向にハケ上げており、他の類型と成形技法が異なる。胎土はA類が1点見られた。

5類 5類はハケパターンE類を施すものである。15個体が抽出可能で、うち3個体が朝顔形埴輪である。基底部高は不明である。突帯間高は6.8～7.9cmを測る。この類型にE類の線刻、すなわち巻雲形他、多様な線刻を持つものが見られる。突帯高は0.6～1.0cmを測る。突帯下底は1.5～2.5cmとばらつきが見られる。外面調整はB類を含まず、A類、C類、D類からなる。D類が6個体と最も多い。一方で2次調整ヨコハケの欠落したE類が5個体ある。あえてその比率を上げれば30%であり、全類型中最も多い。胎土はA・B類とも見られた。

以上のように各類型それぞれに特徴があり、特に器種の偏差が存在している点は注視してよい。一方、線刻は各類型で混在する場合もあり、ハケパターンと線刻の組み合わせにより埴輪製作者と特定することは難しいようである。2類に見るように円筒埴輪では線刻が混在する傾向が顕著である。このこ

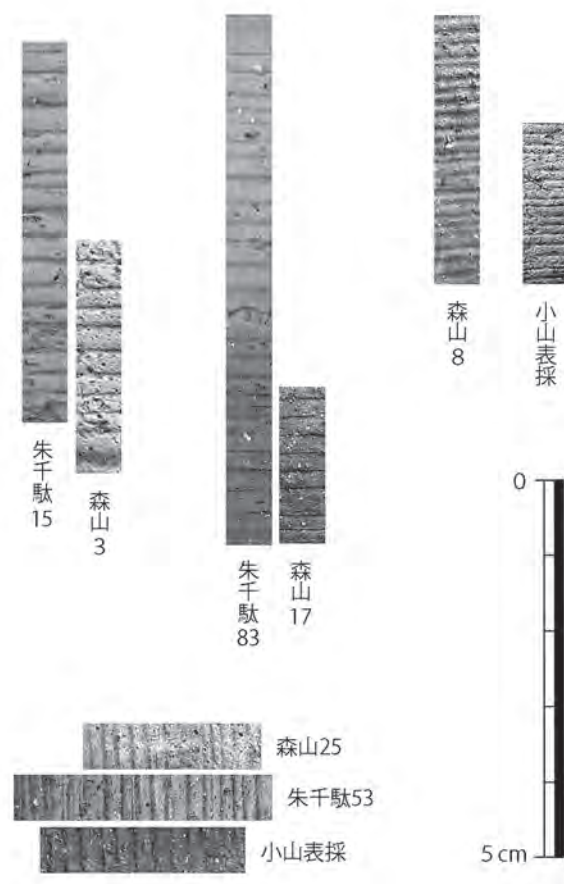
とから、円筒埴輪の製作にあたってハケ工具が共有されていた可能性を指摘しておきたい。また、胎土と各類型との偏在性も見いだせなかった。このことから、胎土についても共有されていたと見るのが妥当であろう。

2 埴輪の時期について

最後に今回出土した埴輪の年代的な位置づけを検討しておこう。朱千駄古墳の埴輪については、報告例があり¹、これらに基づいて詳細な検討がなされている²。それによれば、朱千駄古墳の埴輪は森山古墳よりは新しく、小山古墳とはほぼ同時期とされている。出土した須恵器の年代観からTK23~47、すなわち古墳時代中期後葉、5世紀末に位置づけられている。今回出土した埴輪は底部高、突帯間高ともに平均7.2cmを測る等分割形で、かつ2次調整ヨコハケの欠落が見られる。これら特徴は、これまで指摘される年代観を改めて裏付けるものである。

ここで森山古墳および小山古墳出土³の円筒埴輪とハケパターンを比較したところ、A類、B類、D類において一致することが判明した。しかし、先述したとおり朱千駄古墳の内部においてすらハケ工具の共有が存在した可能性を勘案すれば、単純に同一工人、あるいは同一工房作であると結論することに躊躇を覚える。特に森山古墳、小山古墳ともに朱千駄古墳とは異なるパターンもあり、今少し類例の増加を待って検討したい。

ところで、朱千駄古墳の埴輪には突帯割付技法の欠如や2次調整ヨコハケの欠落などV期につながる要素が既に発生している。一方で底部調整、倒立技法や断続ナデ技法の採用は見られない。すなわち、畿内でこのころ出現するV群系埴輪の製作技術が導入されていない。吉備におけるIV期~V期への移行過程について、現状その詳細は明らかとは言い難い状況である⁴。今回の調査で出土した資料がその解明の糸口となることを期待しつつ、筆を置くこととする。(和田)



各番号は朱千駄古墳は本書、森山古墳は註3 a、小山古墳は註3 bの掲載番号に準じる。

第37図 周辺古墳とのハケパターン比較図 (1/1)

註

- 1 a 春成秀爾「備前の大形古墳の再検討」『古代を考える』31 古代を考える会 1982
- b 葛原克人「朱千駄古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県 1986
- c 「〔1〕朱千駄古墳」『岡山県埋蔵文化財報告』23 岡山県教育委員会 1993
- 2 宇垣匡雅「V 両宮山古墳とその周辺」『日本の遺跡 14 両宮山古墳』同成社 2006
- 3 a 『森山古墳 両宮山古墳』赤磐市教育委員会 2004
- b 『史跡両宮山古墳中堤保存工事報告書』赤磐市教育委員会 2008
- 4 廣瀬 覚「①西日本の円筒埴輪」『古墳時代の考古学 1 古墳時代史の枠組み』同成社 2011

表3 遺物観察表

埴輪観察表

掲載番号	出土地区名	遺構・土層名	器種	分類	ハケバターン	計測値 (cm)							口縁形状	突帯形状	底部押圧類型	線刻類型	外面調整類型	色調 (外面)	胎土 (肉眼観察)	残存状況	備考	
						口径	底径	器高	口縁部高	突帯間高	基底部高	突帯高										突帯下幅
1	1区東	第11層	円筒埴輪	—	—	[31.5]	—	(9.3)	—	—	—	—	A1	—	—	—	—	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	砂礫 長・英 (多)・赤	口縁部 1/7	摩滅	
2	1区中	第11層	円筒埴輪	3類	C	[31.8]	—	(8.6)	—	—	—	—	A1	—	—	—	—	橙色 (7.5YR7/6)	細礫 長・英 (多)・曇	口縁部 1/5		
3	1区中	第10層	円筒埴輪	1類	A	[40.4]	—	(10.7)	—	—	—	—	A1	—	—	D	—	橙色 (7.5YR6/6)	砂礫 長・英 (多)・曇・赤	口縁部 1/9		
4	1区西	第10層	円筒埴輪	1類	A	[40.2]	—	(24.9)	11.7	7.3	—	0.5	1.7	A1	B	—	B	C	浅黄色 (2.5Y7/3)	砂礫 長・英・赤 (多)	口縁部 1/12	線刻、透かし孔
5	1区西	第12層	円筒埴輪	3類	C	[40.0]	—	(25.7)	12.0	6.9	—	0.8	2.0	B1	B	—	—	D	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	砂礫 長・曇・赤 (多)	口縁部 1/6	
6	2区東	第9層	円筒埴輪	2類	B	[45.0]	—	(9.5)	—	—	—	—	—	B2	—	—	—	D	橙色 (5YR7/8)	砂礫 長・英 (多)・赤	口縁部 1/6	
7	1区中	第11層	円筒埴輪	3類	C	—	—	(15.3)	10.9	—	—	0.7	2.6	A2	B	—	—	A	橙色 (5YR7/8)	細礫 長・英 (多)・曇	口縁部片	
8	1区西	第11層	円筒埴輪	1類	A	—	—	(13.5)	9.9	—	—	0.7	2.6	B1	B	—	—	D	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	細礫 長・英 (多)・曇	口縁部片	
9	2区東	溝2・3	円筒埴輪	—	—	—	—	(12.8)	9.4	—	—	0.3	1.7	A1	B	—	—	—	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	細砂 長・英・曇	口縁部片	
10	2区東	溝2・3	円筒埴輪	1類	A	—	—	(12.7)	—	—	—	—	—	B2	—	—	—	D	橙色 (7.5YR7/6)	細礫 長・英 (多)・赤	口縁部片	
11	1区中	第11層	円筒埴輪	3類	C	—	—	(11.6)	—	—	—	—	—	B2	—	—	—	A	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	砂礫 長・曇・赤 (多)・黒	口縁部片	
12	1区中	T 2 (H28) 第10・11層相当	円筒埴輪	2類	B	—	—	(12.9)	—	—	—	—	—	A1	—	—	—	A	明黄褐色 (10YR7/6)	細礫 長・英 (多)・曇	口縁部片	割離
13	1区西	第10・11層	円筒埴輪	2類	B	—	—	(14.2)	—	—	—	—	—	A1	—	—	—	D	橙色 (5YR7/6)	細礫 長・英 (多)	口縁部片	
14	1区中	第11層	円筒埴輪	2類	B	—	—	(9.7)	—	—	—	—	—	A2	—	—	—	A	橙色 (5YR6/6)	砂礫 長 (多)・英・曇	口縁部片	
15	1区西	第11層	円筒埴輪	1類	A	—	—	(9.1)	—	—	—	—	—	A1	—	—	—	A	橙色 (5YR7/6)	砂礫 長・英	口縁部片	
16	1区中	第11層	円筒埴輪	3類	C	—	—	(12.4)	—	—	—	—	—	A1	—	—	—	A	橙色 (7.5YR7/6)	細礫 長・英 (多)・曇	口縁部片	
17	1区西	第11層	円筒埴輪	3類	C	—	—	(11.5)	—	—	—	—	—	A1	—	—	—	D	橙色 (7.5YR7/6)	砂礫 長・英 (多)・赤	口縁部片	
18	1区西	第10・11層	円筒埴輪	1類	A	—	—	(8.7)	—	—	—	—	—	A2	—	—	—	D	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	細礫 長・英 (多)	口縁部片	
19	1区東	第11層	円筒埴輪	2類	B	—	—	(9.1)	—	—	—	—	—	B2	—	—	—	A	橙色 (5YR7/6)	砂礫 長・英 (多)・曇	口縁部片	線刻 (別付線)
20	1区中	T 2 (H28) 第10・11層相当	円筒埴輪	2類	B	—	—	(5.5)	—	—	—	—	—	B1	—	—	—	D	橙色 (2.5YR6/6)	細礫 長・英 (多)・赤	口縁部片	
21	1区西	第11層	円筒埴輪	5類	E	—	—	(17.0)	—	6.8	—	0.7	2.1	—	A	—	—	E	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	細礫 長・英 (多)・曇・赤	筒部片	透かし孔
22	1区西	第10・11層	円筒埴輪	1類	A	—	—	(14.2)	—	6.3	—	0.6	2.6	—	B	—	—	A	橙色 (7.5YR7/6)	細礫 長・英 (多)	筒部片	
23	1区中	第11層	円筒埴輪	5類	E	—	—	(16.5)	—	7.9	—	0.6	2.0	—	B	—	—	E	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	細礫 長・英 (多)・曇	筒部片	
24	1区東	T 3 (H28) 第10・11層相当	円筒埴輪	1類	A	—	—	(21.3)	—	6.8	—	0.5	2.6	—	B	—	—	A	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	細礫 長・英 (多)・赤	筒部片	透かし孔
25	1区中	第11層	円筒埴輪	3類	C	—	—	(14.6)	—	7.3	—	0.6	2.0	—	A	—	—	A	橙色 (7.5YR7/6)	細礫 長・英 (多)・曇・赤	筒部片	透かし孔
26	1区中	第10・11層	円筒埴輪	5類	E	—	—	(15.8)	—	7.6	—	1.0	1.5	—	A	—	—	C	橙色 (5YR7/6)	細礫 長・英 (多)・曇・赤	筒部片	透かし孔
27	1区中	第11層	円筒埴輪	5類	E	—	—	(19.3)	—	7.4	—	0.6	2.0	—	A	—	—	A	橙色 (5YR7/6)	細礫 長・英 (多)・曇・赤	筒部片	
28	1区東	第11層	円筒埴輪	3類	C	—	—	(16.3)	—	7.5	—	0.8	1.5	—	A	—	B	D	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	細礫 長・英 (多)・曇	筒部片	線刻、透かし孔
29	2区東	第9層	円筒埴輪	2類	B	—	—	(16.5)	—	7.5	—	0.6	2.6	—	B	—	—	A	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	細礫 長・英 (多)・曇	筒部片	透かし孔
30	2区東	溝2・3	円筒埴輪	1類	A	—	—	(22.1)	—	7.2	—	0.5	2.4	—	B	—	—	C	橙色 (2.5YR7/8)	細礫 長・英 (多)	筒部片	透かし孔
31	1区西	第10層	円筒埴輪	5類	E	—	—	(17.8)	—	6.7	—	0.6	1.7	—	A	—	—	E	橙色 (5YR7/6)	細礫 長・英 (多)・曇・赤	筒部片	透かし孔
32	1区西	第10層	円筒埴輪	1類	A	—	—	(17.6)	—	6.8	—	0.5	2.2	—	B	—	—	A	橙色 (7.5YR7/6)	細礫 長・英 (多)	筒部片	透かし孔
33	1区東	第11層	円筒埴輪	4類	D	—	—	(15.0)	—	7.4	—	0.5	2.0	—	A	—	—	C	浅黄色 (2.5Y7/3)	砂礫 長・英・曇・赤 (多)	筒部片	透かし孔
34	1区西	第11層	円筒埴輪	2類	B	—	—	(18.5)	—	7.6	—	0.5	2.0	—	A	—	A	A	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	細礫 長・英 (多)	筒部片	線刻、透かし孔
35	1区東	第11層	円筒埴輪	—	—	—	[25.2]	(14.4)	—	6.4	0.4	2.1	—	—	B	—	—	—	橙色 (7.5YR7/6)	細礫 長・英 (多)・曇・赤	基底部 1/4	底部粗染痕跡
36	1区西	第12層	円筒埴輪	—	—	—	[28.2]	(14.2)	—	6.8	0.5	2.1	—	—	A	—	—	—	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	細礫 長・英 (多)・曇	基底部 1/7	底部工具・粗染痕跡
37	1区西	第11層	円筒埴輪	3類	C	—	26.2	(20.4)	—	6.9	7.0	0.3	2.0	—	A	A	—	D	浅黄色 (2.5Y7/3)	砂礫 長・英・曇・赤 (多)	基底部 1/4	底部工具・粗染痕跡
38	1区西	第12層	円筒埴輪	3類	C	—	27.1	(13.7)	—	6.2	—	—	—	—	B	—	—	E	橙色 (7.5YR7/6)	細礫 長・英 (多)・曇	基底部 1/4	底部工具・粗染痕跡
39	1区西	第11層	円筒埴輪	2類	B	—	[31.8]	(10.1)	—	6.8	—	—	—	—	A	—	—	E	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	細礫 長・英・曇・赤	基底部 1/7	底部工具・粗染痕跡
40	1区東	第11層	円筒埴輪	2類	B	—	30.2	(11.0)	—	7.1	—	—	—	—	A	—	—	A	浅黄色 (2.5Y7/3)	細礫 長・英 (多)・曇・黒	基底部 1/6	底部工具・粗染痕跡
41	1区東	第11層	円筒埴輪	—	—	—	[29.6]	(12.7)	—	8.1	—	—	—	—	C	—	B	—	橙色 (5YR7/8)	細礫 長・英 (多)・曇	基底部 1/7	底部工具・粗染痕跡
42	1区中	第11層	円筒埴輪	1類	A	—	[30.1]	(30.1)	—	7.1	—	—	—	—	A	—	—	D	橙色 (7.5YR7/6)	細礫 長・英 (多)・曇	基底部 1/4	底部工具・粗染痕跡
43	1区東	第11層	円筒埴輪	2類	B	—	[29.8]	(15.0)	—	8.2	—	—	—	—	B	—	—	D	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	細礫 長・英 (多)	基底部 1/7	底部工具・粗染痕跡
44	1区西	第11層	円筒埴輪	—	—	—	[28.6]	(12.3)	—	7.8	—	—	—	—	C	—	—	—	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	細礫 長・英 (多)・曇・赤	基底部 1/4	底部粗染痕跡
45	1区中	第11層	円筒埴輪	2類	B	—	[29.8]	(14.9)	—	8.1	—	—	—	—	A	—	B	—	橙色 (7.5YR7/6)	細礫 長・英 (多)・曇	基底部 1/8	透かし孔、底部工具痕跡
46	1区中	第11層	円筒埴輪	—	—	—	[38.4]	(14.7)	—	6.8	—	—	—	—	A	—	—	D	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	細礫 長・英 (多)・曇	基底部 1/6	底部工具痕跡
47	1区西	第11層	円筒埴輪	2類	B	—	[36.0]	(14.0)	—	6.9	—	—	—	—	A	—	—	E	橙色 (5YR7/8)	細礫 長・英 (多)	基底部 1/6	底部工具・粗染痕跡

掲載 番号	出土 地区名	遺構・土層名	器種	分類	ハケバ ターン	計測値 (cm)							口縁 形状	突帯 形状	底部 押圧 類型	線刻 類型	外面調 整類型	色調 (外面)	胎土 (肉眼観察)	残存状況	備考	
						口径	底径	器高	口縁 部高	突帯 間高	基底 部高	突帯 高										突帯 下幅
48	1区西	第11・12層	朝顔形埴輪	5類	E	[66.0]	-	[21.0]	-	-	0.8	1.8	-	-	-	-	-	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	細礫 長・英・曇・赤 (多)	口縁部片	56と同一 個体か	
49	2区東	第9層	朝顔形埴輪	4類	D	-	-	(15.4)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	褐色 (2.5YR7/8)	細礫 長・英 (多)・曇	口縁部片		
50	1区東	第11層	朝顔形埴輪	-	-	-	-	(9.3)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	褐色 (7.5YR7/6)	細礫 長・英 (多)・曇・赤	口縁部片		
51	1区東	第11層	朝顔形埴輪	-	-	-	-	(8.9)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	浅黄褐色 (7.5YR8/6)	砂礫 長・英・曇・赤 (多)	口縁部片		
52	2区東	溝2・3	朝顔形埴輪	4類	D	-	-	(8.1)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	細礫 長・英 (多)・黒	口縁部片		
53	2区東	溝2・3	朝顔形埴輪	4類	D	-	-	(6.0)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	褐色 (7.5YR7/6)	砂礫 長・英 (多)・赤	口縁部片		
54	1区東	第10・11層	朝顔形埴輪	4類	D	-	-	(7.5)	-	-	-	-	-	-	-	-	D	褐色 (7.5YR7/6)	砂礫 長・英・曇・赤 (多)	口縁部片		
55	1区東	T 3 (H28) 第10・11層相当	朝顔形埴輪	4類	D	-	-	(7.9)	-	-	-	-	-	-	-	-	D	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	細礫 長・英 (多)・曇 (多)・赤	口縁部片		
56	1区西	第6層	朝顔形埴輪	-	-	-	-	(9.1)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	細礫 長・英 (多)・曇	受部片	口縁部一受 部に明瞭な 接合痕	
57	1区中	第11層	朝顔形埴輪	-	-	-	-	(10.1)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	褐色 (5YR7/8)	砂礫 長・英 (多)・赤	受部片	口縁部一受 部に明瞭な 接合痕	
58	2区東	溝2・3	朝顔形埴輪	3類	C	-	-	(8.2)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	砂礫 長・英 (多)・曇	受部片	口縁部一受 部に明瞭な 接合痕	
59	2区東	溝3	朝顔形埴輪	4類	D	-	-	(10.2)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	細礫 長・英 (多)・曇・赤	受部片	口縁部一受 部に明瞭な 接合痕	
60	1区東	第11層	朝顔形埴輪	3類	C	-	-	(8.4)	-	-	0.5	1.9	-	-	-	-	-	褐色 (7.5YR6/6)	砂礫 長・英 (多)・曇	受部片	口縁部一受 部に明瞭な 接合痕	
61	1区西	第11層	朝顔形埴輪	4類	D	-	-	(6.9)	-	-	0.8	1.7	-	-	-	-	-	褐色 (7.5YR7/6)	砂礫 長・英・曇 (多)・赤	受部片		
62	1区中	第11層	朝顔形埴輪	4類	D	-	-	(9.2)	-	-	0.6	(2.0)	-	-	-	-	-	褐色 (5YR7/8)	砂礫 長・英 (多)・曇・赤	受部片		
63	2区東	溝2	朝顔形埴輪	4類	D	-	-	(7.8)	-	-	0.5	1.9	-	-	-	-	-	褐色 (5YR7/6)	細礫 長・英 (多)・曇・赤・黒	受部片		
64	1区中	T 2 (H28) 第10・11層相当	朝顔形埴輪	4類	D	-	-	(11.1)	-	-	0.3	2.0	-	-	-	-	-	褐色 (5YR7/6)	砂礫 長・英 (多)・曇・赤	受部片		
65	1区中	第11層	朝顔形埴輪	4類	D	-	-	(8.4)	-	-	0.3	2.0	-	-	-	-	-	褐色 (7.5YR7/6)	砂礫 長・英・曇 (多)	受部片		
66	1区中	第11層	朝顔形埴輪	5類	E	-	-	(10.5)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	細礫 長・英 (多)・曇・赤	受部片	摩滅	
67	1区東	第11層	朝顔形埴輪	-	-	-	-	(4.2)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	褐色 (7.5YR7/6)	細礫 長 (多)・英・赤	屑部片		
68	1区西	第11層	朝顔形埴輪	-	-	-	-	(5.1)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	細礫 長・英 (多)・曇	屑部片		
69	1区中	第10層	朝顔形埴輪	-	-	-	-	(6.3)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	褐色 (7.5YR7/6)	砂礫 長・英 (多)・曇・赤	屑部片	赤色顔料	
70	2区東	溝3	朝顔形埴輪	-	-	-	-	(8.9)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	浅黄褐色 (2.5Y7/3)	細礫 長・曇 (多)・赤	屑部片	摩滅	
71	1区東	第11層	朝顔形埴輪	3類	C	-	-	10.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	褐色 (7.5YR7/6)	砂礫 長・英 (多)・曇	屑部片		
72	1区中	第10・11層	朝顔形埴輪	-	-	-	-	(22.2)	-	-	0.4	2.2	-	-	-	-	-	褐色 (7.5YR7/6)	細礫 長・英 (多)	筒部片	透かし孔	
73	1区西	第6層	朝顔形埴輪	3類	C	-	-	(13.5)	-	-	0.5	2.0	-	A	-	-	E	にぶい褐色 (7.5YR6/4)	細礫 長・曇・赤 (多)	筒部片	透かし孔	
74	1区西	第12層	朝顔形埴輪	4類	D	-	-	(12.3)	-	-	0.6	2.5	-	B	-	-	D	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	細礫 長・英 (多)	筒部片		
75	1区西	第11層	朝顔形埴輪	5類	E	-	-	(10.8)	-	-	0.9	2.5	-	B	-	-	D	褐色 (7.5YR7/6)	細礫 長・英 (多)・曇・赤	筒部片		
76	1区西	第11層	円筒埴輪	1類	A	-	-	(15.7)	12.0	-	0.5	1.8	A1	B	-	A	D	褐色 (7.5YR7/6)	細礫 長・英 (多)	口縁部片	線刻	
77	1区西	第11層	円筒埴輪	1類	A	-	-	(9.7)	-	-	0.7	1.7	-	B	-	A	D	褐色 (7.5YR7/6)	細礫 長・英 (多)・曇・赤	筒部片	線刻	
78	1区西	第11層	円筒埴輪	1類	A	-	-	(7.0)	-	-	0.3	1.8	-	A	-	A	D	褐色 (7.5YR6/6)	砂礫 長・英・曇・赤	筒部片	線刻	
79	1区東	第11層	円筒埴輪	2類	B	-	-	(5.1)	-	-	0.5	1.7	-	B	-	A	D	褐色 (7.5YR7/6)	砂礫 長・英 (多)・曇・赤	筒部片	線刻	
80	1区中	第11層	円筒埴輪	-	-	-	-	(8.7)	-	-	-	-	B2	-	-	B	-	褐色 (5YR7/6)	砂礫 長・英 (多)	口縁部片	線刻	
81	1区中	第11層	円筒埴輪	2類	B	-	-	(7.0)	-	-	-	-	A1	-	-	B	D	褐色 (5YR7/6)	砂礫 長・英 (多)・曇	口縁部片	線刻	
82	2区東	第9層	円筒埴輪	2類	B	-	-	(8.6)	-	-	0.9	1.9	-	B	-	B	D	灰色 (10Y6/1)	砂礫 長 (多)・曇	筒部片	線刻	
83	1区東	第11層	円筒埴輪	5類	E	-	-	(7.3)	-	-	-	-	A1	-	-	C	D	褐色 (5YR7/6)	砂礫 長・英 (多)・曇	口縁部片	線刻	
84	1区西	第12層	円筒埴輪	-	-	-	-	(9.6)	-	-	-	-	B1	-	-	C	-	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	細礫 長・英 (多)	口縁部片	線刻	
85	1区中	T 2 (H28) 第10・11層相当	円筒埴輪	2類	B	-	-	(11.6)	-	-	-	-	A2	-	-	A	A	褐色 (7.5YR7/6)	細礫 長・英 (多)	口縁部片	線刻	
86	2区東	溝2・3	円筒埴輪	2類	B	-	-	(9.9)	-	-	0.5	1.4	-	B	-	C	A	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	砂礫 長 (多)・曇・赤	筒部片	線刻	
87	1区東	第11層	円筒埴輪	-	-	-	-	(7.3)	-	-	-	-	-	-	-	C	-	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	細礫 長・英 (多)・赤	筒部片	線刻	
88	1区東	第11層	円筒埴輪	-	-	-	-	(6.0)	-	-	0.7	1.4	-	A	-	B	-	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	砂礫 長・曇 (多)・赤	筒部片	線刻	
89	1区西	第12層	円筒埴輪	-	-	-	-	(6.4)	-	-	-	-	-	-	-	E	-	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	細礫 長・英 (多)・曇・赤	筒部片	線刻	
90	2区	T 4 (H28) 第9層相当	円筒埴輪	-	-	-	-	(5.9)	-	-	-	-	-	-	-	E	-	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	砂礫 長・英 (多)・曇・赤	筒部片	剝離	
91	1区東	第10・11層	円筒埴輪	5類	E	-	-	(5.4)	-	-	-	-	B2	-	-	-	E	浅黄褐色 (2.5Y7/4)	砂礫 長 (多)・英・曇	口縁部片	線刻 (割付線)	
92	1区西	第6層	円筒埴輪	5類	E	-	-	(6.5)	-	-	-	-	B1	-	-	-	E	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	砂礫 長・英 (多)・曇	口縁部片	線刻 (割付線) 赤色顔料	
93	1区西	第10・11層	円筒埴輪	3類	C	-	-	(6.7)	-	-	-	-	B1	-	-	-	E	褐色 (7.5YR7/6)	細礫 長・英 (多)・赤	口縁部片	線刻 (割付線)	
94	1区西	第11層	円筒埴輪	4類	D	-	-	(7.9)	-	-	-	-	B1	-	-	-	E	褐色 (7.5YR7/6)	砂礫 長・英・曇 (多)	口縁部片	線刻 (割付線)	
95	1区中	第11層	円筒埴輪	2類	B	-	-	(9.5)	-	-	-	-	A1	-	-	-	E	褐色 (5YR7/6)	細礫 長・英 (多)	口縁部片	線刻	

掲載 番号	出土 地区名	遺構・土層名	器種	分類	ハケバ ターン	計測値 (cm)								口縁 形状	突帯 形状	底部 押圧 類型	線刻 類型	外面調 整類型	色調 (外面)	胎土 (肉眼観察)	残存状況	備考
						口径	底径	器高	口縁 部高	突帯 間高	基底 部高	突帯 高	突帯 下幅									
96	1区西	第6層	朝顔形埴輪	5類	E	-	-	(10.0)	10.9	-	-	-	-	A1	-	-	E	D	にぶい・橙色 (7.5YR7/4)	砂礫 長・英 (多)	口縁部片	線刻
97	1区西	第12層	円筒埴輪	-	-	-	-	(14.8)	-	-	-	0.6	1.6	-	B	-	D	-	にぶい・黄褐色 (10YR7/3)	細礫 長・英 (多)・曇	筒部片	線刻、透かし孔
98	1区西	第11・12層	円筒埴輪	5類	E	-	-	(17.9)	-	-	-	-	-	-	-	-	E	-	橙色 (5YR7/6)	細礫 長・英 (多)	口縁部片	線刻
99	1区西	第12層	円筒埴輪	5類	E	-	-	(13.4)	-	-	-	0.9	1.9	-	A	-	E	D	にぶい・橙色 (7.5YR7/3)	砂礫 長・英・曇・赤 (多)	筒部片	線刻
100	1区東	第11層	円筒埴輪	-	-	-	-	(8.4)	-	-	-	0.6	1.9	-	A	-	E	-	にぶい・黄褐色 (10YR7/3)	砂礫 長・英 (多)	筒部片	線刻
101	2区東	埴輪溜り	盾持ち人形埴輪	-	-	-	-	(16.8)	-	-	-	0.7	2.0	-	B	-	-	-	にぶい・黄褐色 (10YR6/4)	細礫 長 (多)・英・赤	筒部片	透かし孔
102	2区東	埴輪溜り	盾持ち人物埴輪	4類	D	-	-	(21.2)	-	-	-	0.7	2.6	-	B	-	-	-	にぶい・黄褐色 (10YR7/3)	細礫 長・英 (多)・曇・赤	筒部片	割離、被刻、101と同一?
103	2区東	埴輪溜り	盾持ち人物埴輪	4類	D	-	-	(18.7)	-	-	-	0.6	2.6	-	B	-	-	-	にぶい・橙色 (7.5YR7/4)	砂礫 長・英 (多)・曇・赤	筒部片	割離、透かし孔、101と同一?
104	2区東	埴輪溜り	盾持ち人物埴輪	-	-	-	-	(20.1)	-	-	-	0.5	2.4	-	B	-	-	-	橙色 (7.5YR7/6)	砂礫 長・英・赤 (多)	筒部片	割離、101と同一?
105	2区東	埴輪溜り	盾形埴輪	-	-	-	-	(15.7)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	にぶい・黄褐色 (10YR7/4)	細礫 長・英 (多)・曇・赤	桶部片	割離
106	2区東	埴輪溜り	盾形埴輪	-	-	-	-	(16.9)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	橙色 (7.5YR7/6)	細礫 長・英・曇 (多)	桶部片	割離
107	2区東	第9層	盾形埴輪	-	-	-	-	(5.1)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	にぶい・橙色 (7.5YR7/4)	砂礫 長・英 (多)・曇・赤	桶部片	割離
108	2区東	埴輪溜り	盾形埴輪	-	-	-	-	(6.8)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	にぶい・橙色 (7.5YR7/4)	細礫 長・英 (多)・曇	桶部片	割離
109	2区東	第5層	人物形埴輪	-	-	-	-	(7.6)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	にぶい・黄褐色 (10YR7/3)	細礫 長・英 (多)・曇	角髪片	
110	2区東	溝2・3	形象埴輪	-	-	-	-	(5.4)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	橙色 (7.5YR7/6)	砂礫 長・英 (多)・曇	器財部片	2~5mm大の穿孔
111	2区東	溝2・3	形象埴輪	-	-	-	-	(2.8)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	にぶい・橙色 (7.5YR7/4)	細礫 長・英 (多)・曇	器財部片	割離 (ハケマ痕跡)
112	2区東	第9層	形象埴輪	-	-	-	-	(2.8)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	にぶい・橙色 (7.5YR7/4)	砂礫 長・英 (多)・曇	器財部片	割離?
113	2区東	溝2・3	形象埴輪	-	-	-	-	(12.1)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	橙色 (7.5YR7/6)	細礫 長・英 (多)・曇	器財部片	割離?
114	1区西	排土	円筒埴輪	-	-	-	-	(3.7)	-	-	-	-	-	-	B	-	-	-	にぶい・黄褐色 (10YR7/4)	細礫 長・英・曇 (多)・赤	口縁部片	線刻 (別付線)、胎土分析試料番号15
115	1区西	側溝	円筒埴輪	-	-	-	-	(3.9)	-	-	-	-	-	-	A1	-	-	-	橙色 (7.5YR7/6)	細礫 長・英 (多)・曇	口縁部片	胎土分析試料番号2
116	1区西	側溝	円筒埴輪	-	-	-	-	(3.3)	-	-	-	-	-	-	B	-	-	-	橙色 (7.5YR7/6)	砂礫 長・英	口縁部片	胎土分析試料番号4
117	1区西	側溝	円筒埴輪	-	-	-	-	(4.5)	-	-	-	-	-	-	A1	-	-	-	にぶい・橙色 (7.5YR7/4)	細礫 長・英 (多)・赤	口縁部片	胎土分析試料番号1
118	1区西	第11層	円筒埴輪	-	-	-	-	(5.2)	-	-	-	-	-	-	A1	-	-	-	橙色 (5YR7/6)	細砂 長・英・曇	口縁部片	胎土分析試料番号13
119	1区西	第11層	円筒埴輪	-	-	-	-	(6.1)	-	-	-	-	-	-	B1	-	-	-	橙色 (7.5YR7/6)	砂礫 長・英・曇	口縁部片	胎土分析試料番号11
120	1区東	第11層	円筒埴輪	-	-	-	-	(5.0)	-	-	-	-	-	-	A1	-	-	-	にぶい・黄色 (2.5Y6/3)	砂礫 長・英・曇 (多)	口縁部片	胎土分析試料番号19
121	1区西	第11層	円筒埴輪	-	-	-	-	(6.2)	-	-	-	-	-	-	B1	-	-	-	にぶい・黄褐色 (10YR7/3)	砂礫 長 (多)・曇	口縁部片	線刻 (別付線)、胎土分析試料番号7
122	1区東	第11層	円筒埴輪	2類	B	-	-	(6.9)	-	-	-	-	-	-	A1	-	-	D	橙色 (7.5YR7/6)	砂礫 長・英 (多)・曇・赤	口縁部片	胎土分析試料番号21
123	1区西	第11層	円筒埴輪	2類	B	-	-	(9.1)	-	-	-	-	-	-	A1	-	-	D	にぶい・橙色 (7.5YR7/4)	砂礫 長・英 (多)	口縁部片	胎土分析試料番号14
124	1区西	第11層	円筒埴輪	5類	E	-	-	(12.2)	-	-	-	-	-	-	B1	-	-	D	橙色 (5YR7/6)	細礫 長・英・曇・赤	口縁部片	胎土分析試料番号10
125	1区西	側溝	円筒埴輪	3類	C	-	-	(9.8)	-	-	-	-	-	-	B1	-	-	D	橙色 (7.5YR7/6)	砂礫 長・英	口縁部片	胎土分析試料番号3
126	1区西	側溝	円筒埴輪	-	-	-	-	(5.6)	-	-	-	-	-	-	B1	-	-	-	橙色 (7.5YR7/6)	砂礫 長・英 (多)・赤	口縁部片	胎土分析試料番号5
127	1区西	側溝	円筒埴輪	5類	E	-	-	(4.5)	-	-	-	-	-	-	A	-	-	D	浅黄褐色 (7.5YR8/6)	砂礫 長・英・曇 (多)・赤	口縁部片	胎土分析試料番号6
128	1区中	第11層	朝顔形埴輪	-	-	-	-	(3.1)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	橙色 (7.5YR7/6)	砂礫 長・英 (多)・赤	口縁部片	胎土分析試料番号18
129	1区東	第11層	朝顔形埴輪	3類	C	-	-	(5.9)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	E	橙色 (7.5YR6/6)	砂礫 長・英 (多)・赤・曇	口縁部片	胎土分析試料番号20
130	1区中	第10層	朝顔形埴輪	-	-	-	-	(3.6)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	橙色 (7.5YR7/6)	細礫 長・英 (多)・赤	口縁部片	胎土分析試料番号16
131	1区西	第11層	朝顔形埴輪	-	-	-	-	(5.7)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	にぶい・黄褐色 (10YR7/3)	砂礫 長・英 (多)・曇	口縁部片	胎土分析試料番号9
132	1区西	第11層	朝顔形埴輪	-	-	-	-	(7.7)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	砂礫 長・英 (多)・曇 (多)	口縁部片	胎土分析試料番号8
133	1区中	第11層	朝顔形埴輪	4類	D	-	-	(4.1)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	橙色 (5YR7/8)	細砂 長・英・曇 (多)	口縁部片	胎土分析試料番号17
134	1区西	第12層	朝顔形埴輪	-	-	-	-	(3.3)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	にぶい・黄褐色 (10YR7/4)	細礫 長・英 (多)	肩部片	胎土分析試料番号12

須恵器・土師器・瓦観察表

掲載番号	出土地区名	遺構・土層名	種別	器種	計測値 (cm)			色調 (外面)	胎土	残存状況	調整		備考
					口径	底径	器高				胎土	内面	
135	2区東	第9層	須恵器	杯身	—	—	(12.7)	灰色 (N6/)	砂礫 長・英	底部 1/7	ケズリ・ナデ	ナデ	
136	1区西	第11層	土師器	鉢	2.9	—	3.7	橙色 (5YR6/8)	砂礫 長	完形	ユビオサエ	ユビオサエ	ミニチュア土器
137	1区東	第11層	土師器	碗	—	6.2	(1.6)	赤褐色 (10R6/6)	砂礫 長・英・曇・赤 (多)		ナデ	ナデ	
138	1区東	第11層	土師器	碗	—	8.0	(1.5)	にぶい橙色 (5YR7/4)	細砂 長・曇・赤		ナデ	ナデ	
139	2区東	溝2・3	土師器	皿	9.2	7.2	1.8	浅黄褐色 (7.5YR8/3)	砂礫 長・英	底部 3/4	ヨコナデ	ヨコナデ	
140	2区東	第9層	土師器	鍋	—	—	(4.0)	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	細砂 長・英・曇	口縁部片	ヨコナデ、ハケメ	ハケメ	スス付着
141	2区東	溝3	須恵器	甕	—	—	(5.3)	灰色 (N5/)	砂礫 長 (多)・曇	底部片	タタキ痕、ナデ	ナデ	
142	1区東	T 3 (H28) 第10・11層相当	瓦	丸瓦	—	—	(9.5)	黄灰色 (2.5Y6/1)	細礫 長・英 (多)・曇	破片	縄目、ナデ消し	布目	
143	2区	T 4 (H28) 第9層相当	瓦	丸瓦	—	—	(14.0)	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	細礫 長・英・赤	破片	縄目?、ナデ消し	布目	
144	1区西	第11層	瓦	丸瓦	—	—	(12.5)	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	砂礫 長・英・曇 (多)	破片	ナデ	布目、糸切り痕	
145	2区東	溝3	瓦	平瓦	—	—	(22.6)	にぶい黄褐色 (10YR7/2)	細礫 長・英 (多)	破片	布目	縄目	
146	1区西	第11層	瓦	平瓦	—	—	(32.3)	灰黄色 (2.5Y7/2)	微砂 長・英 (多)・曇・赤	破片	布目、糸切り痕	縄目	
147	1区中	第10層	瓦	平瓦	—	—	(13.0)	灰白色 (2.5Y7/1)	砂礫 長・英・曇 (多)・赤	破片	布目、糸切り痕	縄目	
148	1区東	第11層	瓦	平瓦	—	—	(12.1)	灰黄褐色 (10YR6/2)	細礫 長・英 (多)	破片	布目、糸切り痕	縄目	
149	2区東	溝2・3	瓦	平瓦	—	—	(14.8)	灰白色 (5Y7/1)	細礫 長・英	破片	布目、糸切り痕	方形格子目	
150	1区中	第10層	瓦	平瓦	—	—	(10.1)	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	細礫 長・英・赤	破片	布目	横方向格子目	
151	1区西	第10・11層	瓦	平瓦	—	—	(33.1)	浅黄褐色 (7.5YR8/4)	細礫 長・英・赤 (多)	破片	布目、糸切り痕	横方向格子目	
152	1区中	第11層	瓦	平瓦	—	—	(12.5)	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	細礫 長 (多)・英・曇・赤	破片	布目、糸切り痕	横方向格子目	

凡例

- 「遺構・土層名」のうち、土層番号は第6図と対応する。
- 「計測値」の数値欄に表記は、以下の意味を示している。
数 値：完存値 (数 値)：残存値 [数 値]：推定復元値 —：計測不能
- 埴輪観察表の「分類」・「ハケパターン」・「口縁形状」・「突帯形状」・「突帯押圧類型」・「線刻類型」・「外面調整類型」の各種分類表記および「口縁部高」・「突帯間高」・「基底部高」の計測位置は、第5章第2節に準じている。
- 「胎土・鋳物」のうち、粒径が3.0mm以上を細礫、2.0～3.0mmを砂礫、1.0～2.0mmを細砂、0.5～1.0mmを微砂として示した。鋳物は石英を「英」、長石を「長」、雲母を「曇」、角閃石を「角」とし、鋳物名称不詳の赤色土粒を「赤」、黒色土粒を「黒」と記した。また、量を多く含むものは(多)を付した。なお、これらの識別は肉眼観察による。
- 「残存状況」は、計測部位の状態を分数あるいは小破片は「片」・「破片」と示した。また、全体の残存状況が高いものは、「完形」と記した。

1 朱千駄古墳遠景
(北から)



2 1区西完掘状況
(東から)



3 1区西端状況
(東から)



図版 2



1 1区中完掘状況
(東から)



2 1区東完掘状況
(東から)



3 1区東側断面
(南から)

1 2区西完掘状況
(南東から)

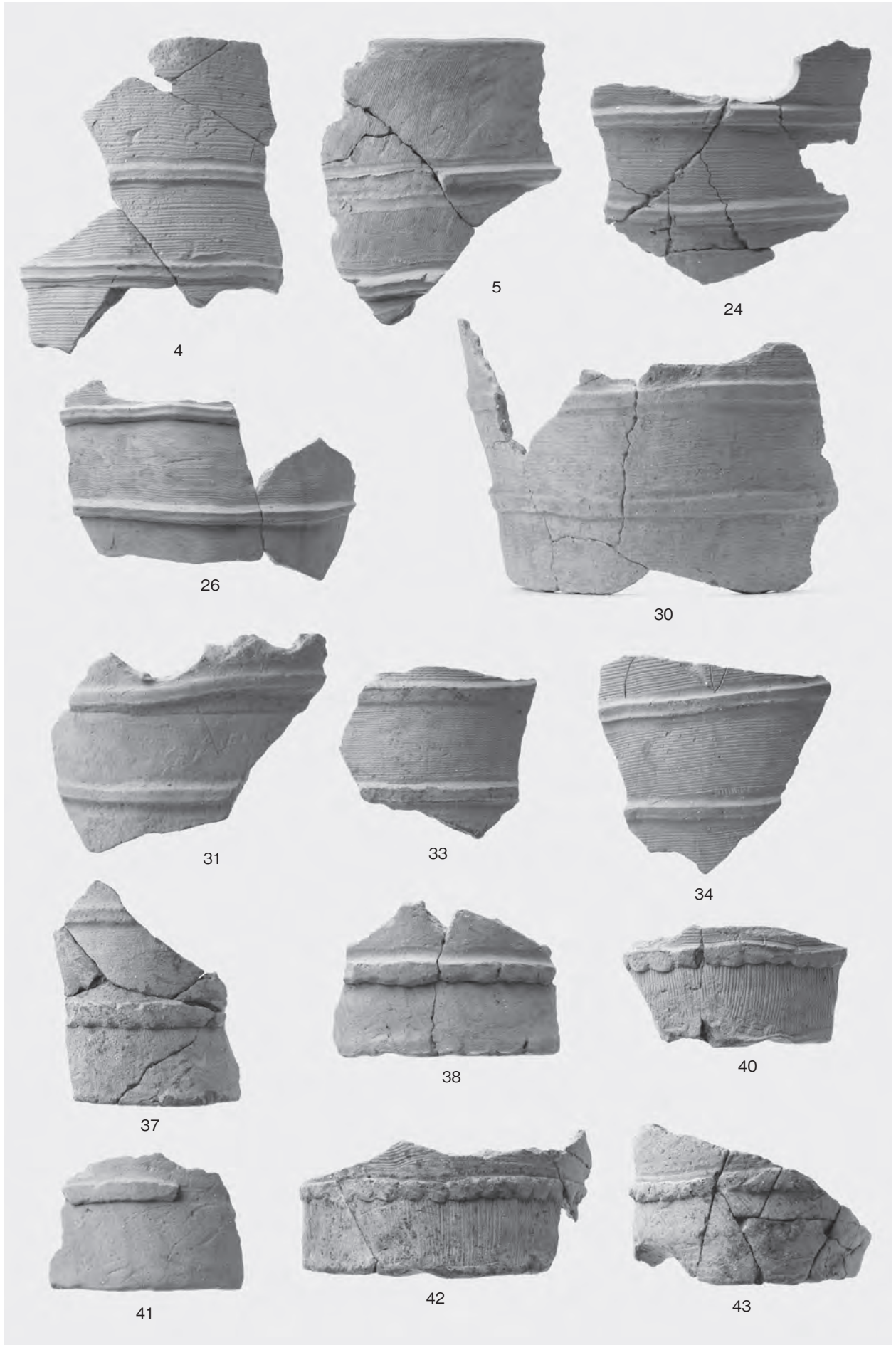


2 2区東完掘状況
(西から)

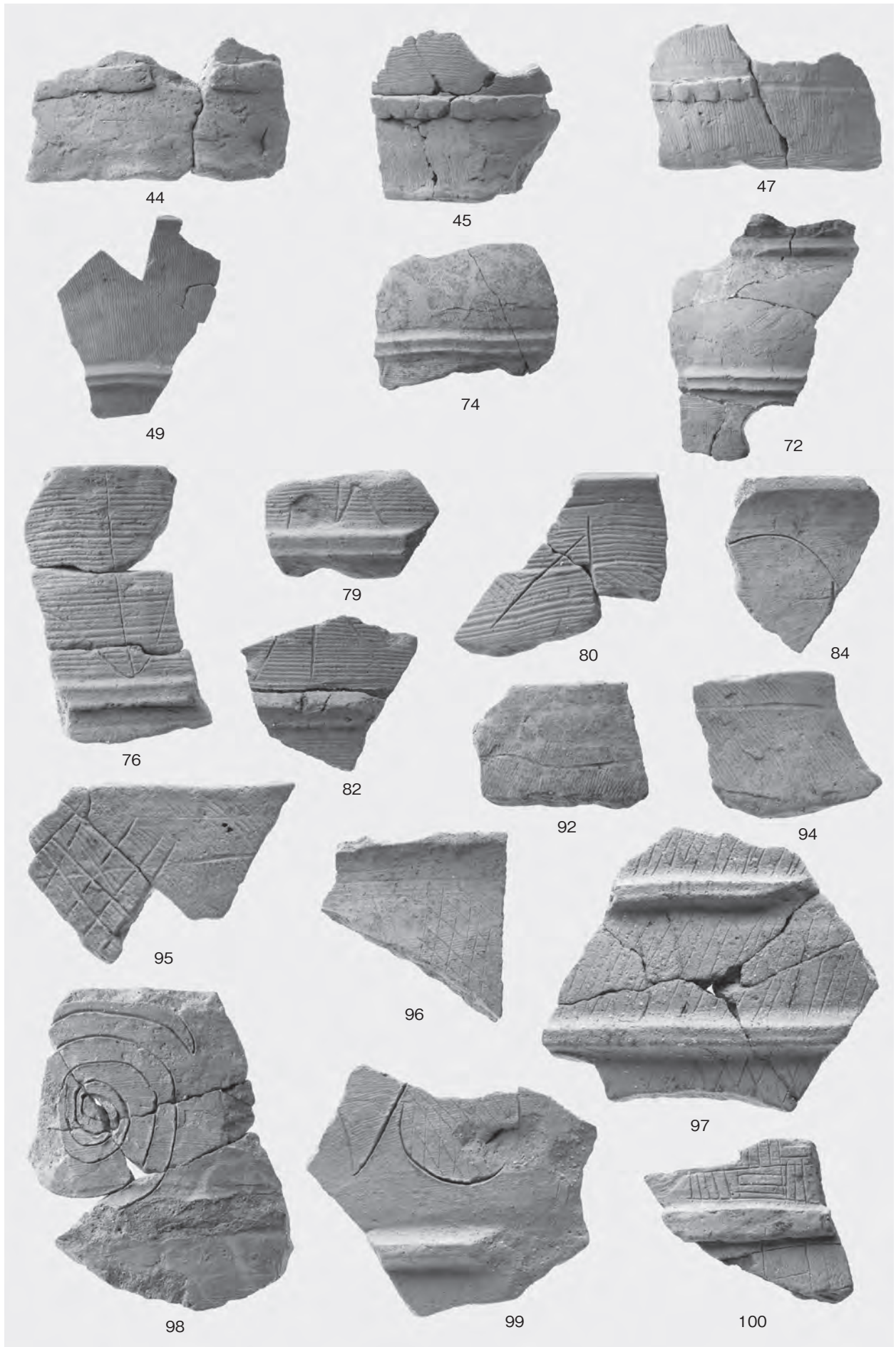


3 2区東完掘状況
(東から)

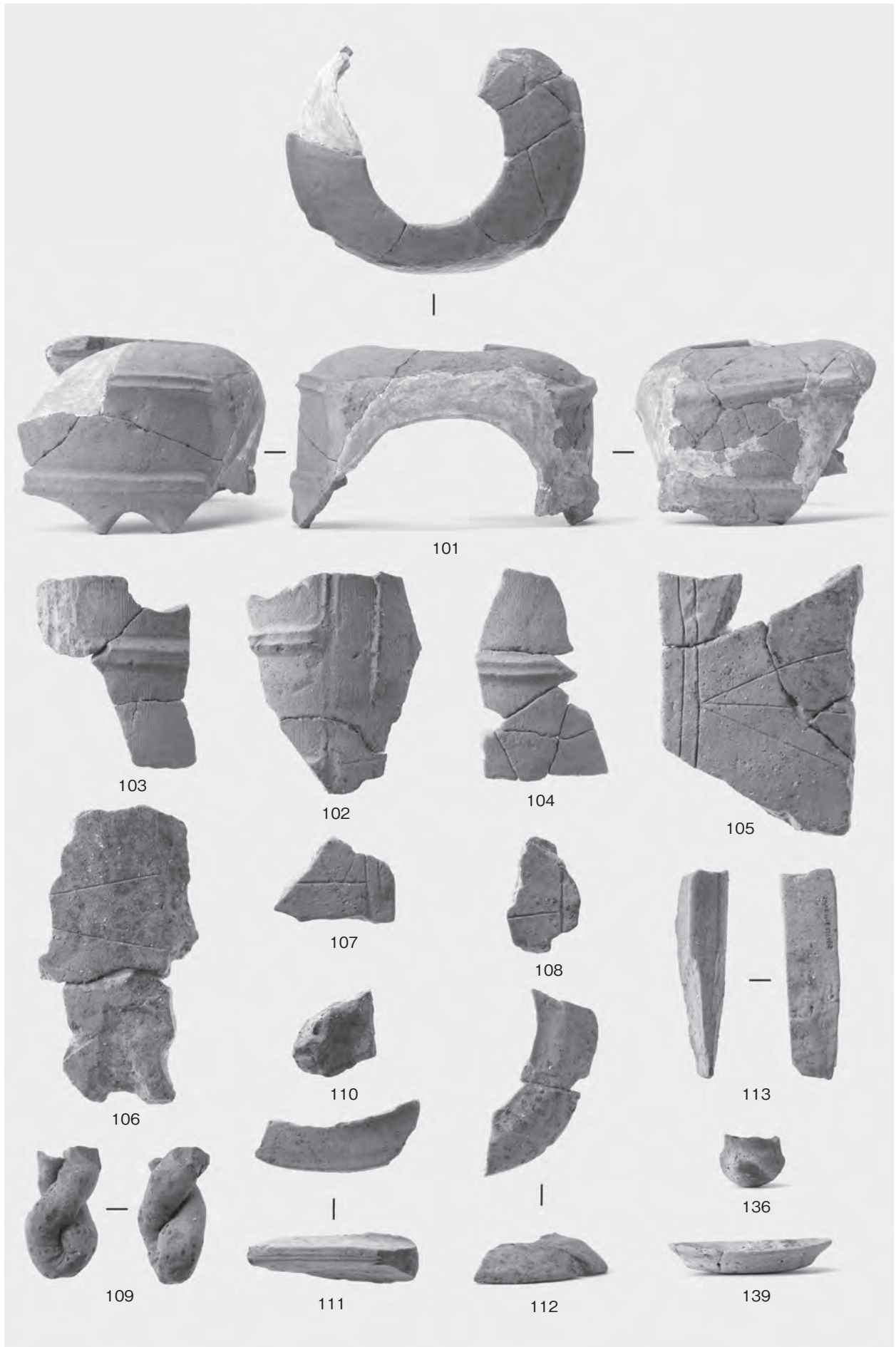




円筒埴輪



円筒埴輪・朝顔形埴輪・線刻をもつ円筒埴輪



報告書抄録

ふりがな	しゅせんだこふん							
書名	朱千駄古墳							
副書名	県道馬屋瀬戸線道路改築に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	250							
編著者名	澤山孝之・氏平昭則・和田 剛・大橋雅也・白石 純							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻1325-3 TEL 086-293-3211 URL http://www.pref.okayama.jp/site/kodai/							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市北区内山下2-4-6 TEL086-224-2111							
発行年月日	2019年12月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° , ' , ''	東経 ° , ' , ''	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
しゅせんだこふん 朱千駄古墳	おかやまけんあかいわし 岡山県赤磐市馬屋 423-1ほか	33322	333220229	34° 44' 2''	133° 59' 58''	20190104 ～ 20190330	440	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
朱千駄古墳	古墳	古墳時代			須恵器・土師器・埴輪			
		古代～中世	溝3条		須恵器・土師器・瓦			
要約	<p>調査地は、朱千駄古墳の北側墳端や周濠及び周堤が想定される位置にあたる。調査の結果、くびれ部付近と想定される調査区西側で、平成4年度の確認調査で検出した地形の下がりつつつながる痕跡を検出し、墳丘の形状や規模を推測する手がかりが得られた。ただし、後世に地形改変を受けている可能性も考えられる。この他の遺構としては、中世に掘削された溝を3条検出した。</p> <p>遺物は古墳時代～中世の遺物、特にまとまった量の埴輪が出土した。埴輪は朝顔形埴輪を含む円筒埴輪が主体を占め、器財・人物などの形象埴輪も認められた。この他の遺物としては、近接する備前国分尼寺等で用いられたと考えられる古代の丸瓦・平瓦や中世の土師器碗や小皿の破片などが出土した。</p>							

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 250

朱千駄古墳

県道馬屋瀬戸線道路改築に伴う発掘調査

令和元年12月20日 印刷

令和元年12月20日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市北区西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市北区内山下2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社
岡山県総社市駅南一丁目1番地5

